

K-509

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第12集

法 將 寺

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書

法 将 寺 遺 跡

昭和60年2月

米 沢 市 教 育 委 員 会

序文

本報告書は、米沢市経済部農林課の民有林林道開設事業小峠線開設工事に伴って、本市教育委員会が昭和58年7月から8月まで実施した、法将寺遺跡緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

法将寺遺跡から、縄文時代前期及び中期の竪穴住居跡を始めとして早期、前期、中期の土器、土偶、石器などの多くの遺物が発掘されました。中でも、縄文時代前後の住居跡は置賜地方でも発掘例が少なく、集落構成を研究する上でも貴重なものであります。また、縄文早期の土器群も関東地方の影響がみられ、これまで福島県以南でのみしか発見されなかった常世式土器がこの法将寺遺跡で初めて出土しております。

今回の調査から、縄文時代において、この地方が関東方面の文化圏と広域な文化交流があったことが判りました。また、この遺跡の面積が約8万m²におよぶ大複合遺跡であることも推定されました。おそらくは、八幡原遺跡群、戸塚山古墳群とともに本市を代表する遺跡のひとつと言えましょう。

本市教育委員会におきましては、これらの遺跡群をふくめて数多くの埋蔵文化財の保護保存に努力してまいり所存であります。本書が埋蔵文化財に対するおおかたのご理解の一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、米沢市経済部農林課並びに地元万世町梓山地区の皆様に心から感謝申しあげます。

昭和60年1月

米沢市教育委員会

教育長 北口二郎

例　　言

1. 本報告書は昭和58年7月17～同年8月18に実施した、米沢市万世町梓山から同関根小峠に通する林道小峠線の開設工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は米沢市教育委員会が主体となって、米沢市経済部農林課と協議のうえ実施したものである。
3. 調査体制は次の通りである。

調査総括 黒田信介 米沢市教育委員会社会教育課長

調査主任 手塚 孝 調査担当

現場主任 菊地政信

同副主任 亀田昊明

調査員 小松佳子、樋口真紀

調査補助員 佐藤嘉広、中島正己、我妻徳枝

作業員 我妻清五郎、佐藤秀司、我妻新蔵、我妻宮一、黒田孝一、梅津保子

事務局長 引地孝忠

事務局員 木村琢美、金子正廣

調査協力 佐藤 保、我妻 実、地元地権者、米沢市経済部農林課

4. 挿図の縮尺は遺構を60分の1、40分の1、土器の実測図、拓影図を3分の1、石器の実測図を1.5分の1、礫を3分の1、5分の1とした。写真図版は、完形土器については縮尺不同、土器片、石器をそれぞれ2分の1とした。挿図に用いた北の方向は真北に統一した。

5. 本書の作成は手塚 孝が中心になり、菊地政信、亀田昊明、小松佳子が補佐し、編集は手塚 責任校正は木村琢美、森谷幸彦がその責務に当った。

本文目次

序文

題字 佐田 有義（法将寺住職）

例言

1 遺跡の概要	1
2 調査の経過	1
3 検出された遺構	4
1) 第III層面の遺構	4
2) 第II層面の遺構	11
4 出土遺物	25
1) 土器	26
2) 石器	44
5まとめ	56

挿図目次

第1図 法将寺遺跡周辺の遺跡分布図	2
第2図 法将寺遺跡グリッド配図	3
第3図 法将寺遺跡遺構全体図（1）	5
第4図 法将寺H Y50平面図	6
第5図 法将寺H Y51平面図	7
第6図 法将寺H Y52平面図	9
第7図 法将寺遺跡遺構全体図（2）	10
第8図 法将寺H Y49平面図	12
第9図 法将寺遺跡B Y126 平面図	14
第10図 法将寺遺跡埋設土器遺構平面図	15
第11図 法将寺遺跡土壤平面図（1）	16
第12図 法将寺遺跡土壤平面図（2）	17
第13図 法将寺遺跡土壤平面図（3）	18
第14図 法将寺遺跡土壤平面図（4）	19
第15図 法将寺遺跡土壤平面図（5）	20
第16図 法将寺遺跡土壤平面図（6）	21

第17図 法将寺遺跡土壠平面図（7）	22
第18図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（1）	29
第19図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（2）	30
第20図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（3）	31
第21図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（4）	32
第22図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（5）	33
第23図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（6）	34
第24図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（7）	35
第25図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（8）	36
第26図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（9）	37
第27図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（10）	38
第28図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（11）	39
第29図 法将寺遺跡遺構内出土遺物（12）	40
第30図 法将寺遺跡包含層出土遺物（1）	41
第31図 法将寺遺跡包含層出土遺物（2）	42
第32図 法将寺遺跡包含層出土遺物（3）	43
第33図 法将寺遺跡出土石器実測図（1）	52
第34図 法将寺遺跡出土石器実測図（2）	53
第35図 法将寺遺跡出土石器実測図（3）	54
第36図 法将寺遺跡出土蝶実測図（1）	55

付 表 目 次

第1表 法将寺遺跡遺構計測分類表	24
第2表 法将寺遺跡出土石器計測分類表	45
第3表 法将寺遺跡出土石器計測表	49

図 版 目 次

第一図版 法将寺遺跡の発掘（一）

第III層面遺構全景

第II層面遺構全景

第二図版 法将寺遺跡の発掘（二）

H Y51全景

H Y52全景

第三図版 法将寺遺跡の発掘（三）

H Y50全景

B Y136 全景

第四図版 法将寺遺跡の発掘（四）

H Y49全景

I Y94全景

第五図版 法将寺遺跡の発掘（五）

D Y13遺物出土状況

D Y 3 全景

第六図版 法将寺遺跡遺構出土の土器（一）

第七図版 法将寺遺跡遺構出土の土器（二）

第八図版 法将寺遺跡遺構出土の土器（三）

第九図版 法将寺遺跡遺構出土の土器（四）

第十図版 法将寺遺跡遺構出土の土器（五）

第十一図版 法将寺遺跡遺構出土の土器（六）

第十二図版 法将寺遺跡遺構出土の大器（七）

第十三図版 法将寺遺跡遺構出土の大器（八）

第十四図版 法将寺遺跡遺構出土の大器（九）

第十五図版 法将寺遺跡遺構出土の大器（十）

第十六図版 法将寺遺跡包含層出土の土器（一）

第十七図版 法将寺遺跡包含層出土の土器（二）

第十八図版 法将寺遺跡包含層出土の土器（三）

第十九図版 法将寺遺跡包含層出土の土器（四）

第二十図版 法将寺遺跡出土完形土器（一）

第二十一図版 法将寺遺跡出土完形土器（二）

第二十二図版 法将寺遺跡出土の石器（一）

第二十三図版 法将寺遺跡出土の石器（二）

1 遺跡の概要

法将寺遺跡は米沢市万世町梓山字立代に所在する。遺跡は昭和8年頃に宮坂善助氏によって発見され、後昭和37年に山形県遺跡地名表に登録された。そして昭和50年の分布調査では法将寺裏の畠を中心とする70m×80mの遺跡包蔵地として登録されている（山形県遺跡番号1176）。その他に梓山地区には昭和44年5月に加藤 稔、佐藤庄一氏によって発掘調査を実施なされている立代遺跡（山形県遺跡番号1175）が東方750mにある。昭和57年～昭和59年にかけて、米沢市教育委員会とまんぎり会は米沢市全域の総合分布調査を実施し、梓山地区で新たに16箇所の遺跡を確認している。

法将寺付近を例にとると、No.278の法将寺b遺跡、No.293の法将寺c遺跡、No.297の法将寺d遺跡の3遺跡が標高502.8mの早坂山からのびる舌状先端部から梓川によって形成された河岸段丘上に立置し、法将寺遺跡（a遺跡とする）がこれまでの遺跡範囲より東南方向に広がることが判り、約80,000m²の遺跡範囲を有することになった。

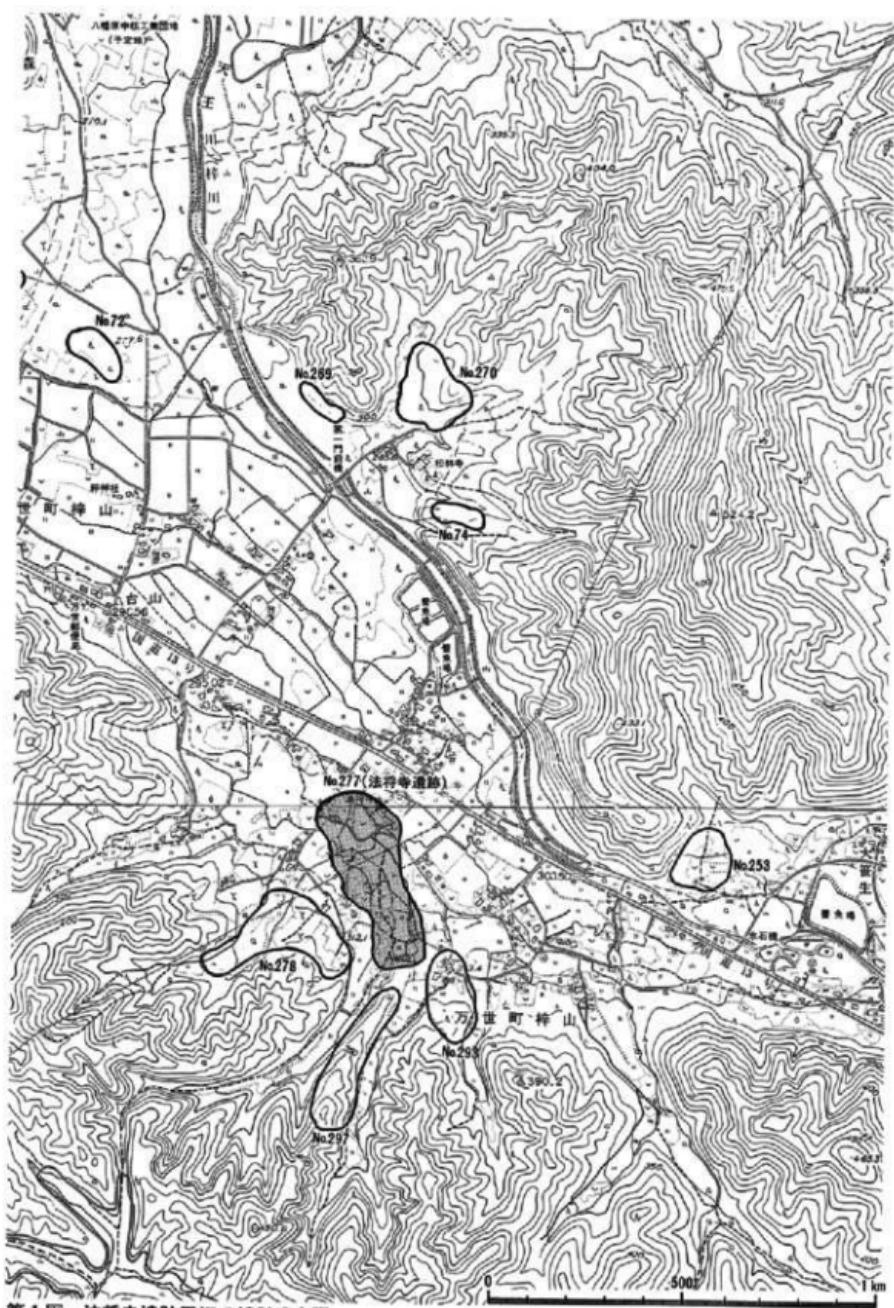
その折、米沢市万世町梓山地内から関根水窪、同小峠地区内に通ずる山形県民有林林道整備事業の林道小峠線が着工する運びとなった。小峠線は3ヶ月の計画で進められて來たものであり、昭和58年度の施工は最終年度に当り、米沢市梓山から水窪ダムにかけての区間内を対象にするものである。林道の万世側に当る梓山にはすでに法将遺跡が存在することが判っており、米沢市教育委員会では工事主体となる米沢市農林課と協議を重ね、昭和58年の7月18日～同年8月18日の約1ヶ月を用いて緊急発掘を実施することにした。

2 調査の経過

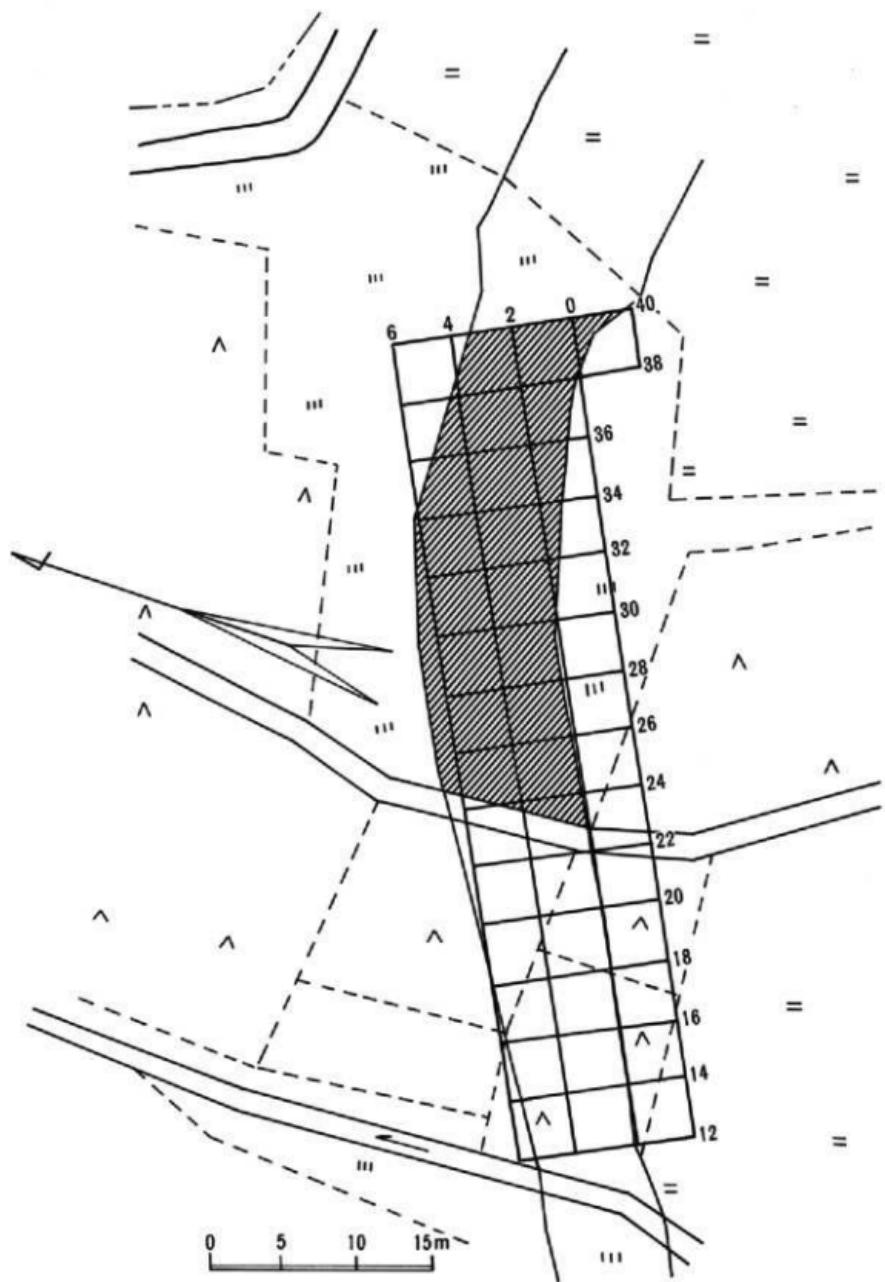
調査に入る前に遺跡の中心部を確認するための事前調査から開始する。平均幅約8mの道路敷地内の試掘を中心に遺物・遺構の確認を行なった結果、河岸段丘上から山麓にかけての180mにかけて遺構の集中箇所がみられることから、調査面積を896m²に設定し、昭和58年7月17日から着工する。

最初に道路幅に沿って4mのグリッドを配し、重機による表土剥離から着手する。調査予定地内は雜木が多いため困難を用いたが、立木は残して、抜根作業は入力で進める方法をとり、7月19日まで表土剥離と抜根作業を終了する。7月20日からは遺構集中箇所を中心にして面整理、精査を開始した結果、13～40-1～6Gを中心にして多数の遺構が検出されるとともに当初一枚の文化層と判断した下面に2枚の文化層が存在することが判り、順次掘り下げて行くことにし、遺構が最も集中する24～40-1～6Gを対象に実施する。従って調査の方法は第II層遺構、掘り下げ、同写真撮影、図面作成、記録を7月21日～7月29日、同様に第III層遺構面を7月30日～8月9日、第IV層遺構面を8月10日～8月18日の順で進めた。

その結果、第II層は繩文中期、第III層は繩文前期の遺構群、第IV層は遺物包含層のため遺構検



第1図 法行寺遺跡周辺の遺跡分布図



第2図 法将寺遺跡、グリッド配図

出は認められなかったものの多量の遺物を検出することが出来た。なお最終精査面積は306m²である。

3 検出された遺構〔第3図～第17図、第1図版～第5図版〕

第II層面遺構、第III層面遺構を中心に136基の遺構が検出されている。先の第II層面遺構は旧河岸段丘（梓川）の直上から舌状先端寄りに分布しているのに対し、第III層面遺構は手前の山麓寄りに分布する特徴がみられた。第II層は砂質シルト層、第III層はII層よりもやや明るい黄褐色粘質シルト層でそれぞれその面から掘り込んで遺構を構築している。ここでは第III層、第II層の順で各検出された遺構について述べてみる。

1) 第III層面の遺構〔第3図～第6図、第1図版～第3図版〕

第III層から第V層を掘り込んで検出されたものでG25～31-3～7Gにかけて3棟の竪穴住居が認められた。この3棟の竪穴住居跡とHY50に併うKY127の4基である。

a 竪穴住居跡〔第3図～第6図〕

すべて隅丸長方形のプランを示す住居跡であり、柱穴は壁下に設する壁柱穴によるものを特徴として、周溝は存在しない。

HY50〔第3図、第6図、第3図版〕

G29, 30-6, 7Gにかけて認められた。北側の一部が道路敷地外であることから正確なプランは不明である。

平面形状—竪穴住居跡の約3分の2が検出されていることから、長方形プランを示す長径3.6m、短径2.3mを有するものとみられる。住居跡の西南に接して存在するKY127は縄文中期に属するもので、住居に併うものではない。

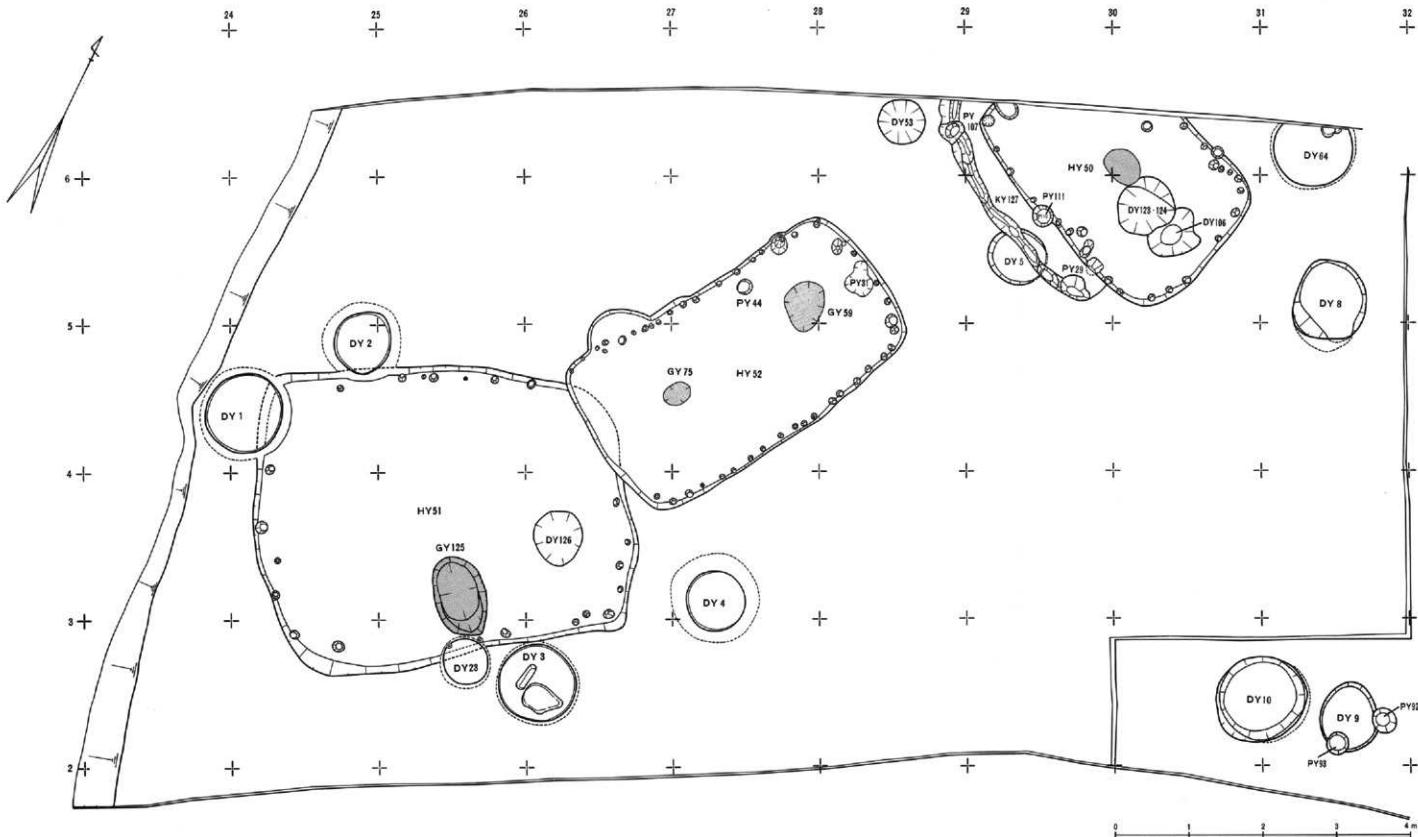
壁—70°～80°の角度で斜位に立ち上り、南東コーナー付近で13cmと最も壁を残しており、南で10cm、北壁で7cm、東9cm、西で5cmを測る。

柱穴—壁面から床面に沿って、P1～P26の26本が10cm～60cmの間隔をもって検出されている北西コーナ部分が調査区域外になっているので、不明と云わざるを得ないが同様な状況を示すものと思われる。柱穴の大きさは7cm～20cmで深さ5cm～32cmと小規模である。ただし、PY111とPY62に関しては第II層面から掘り込んでいることから縄文中期と考えられる。

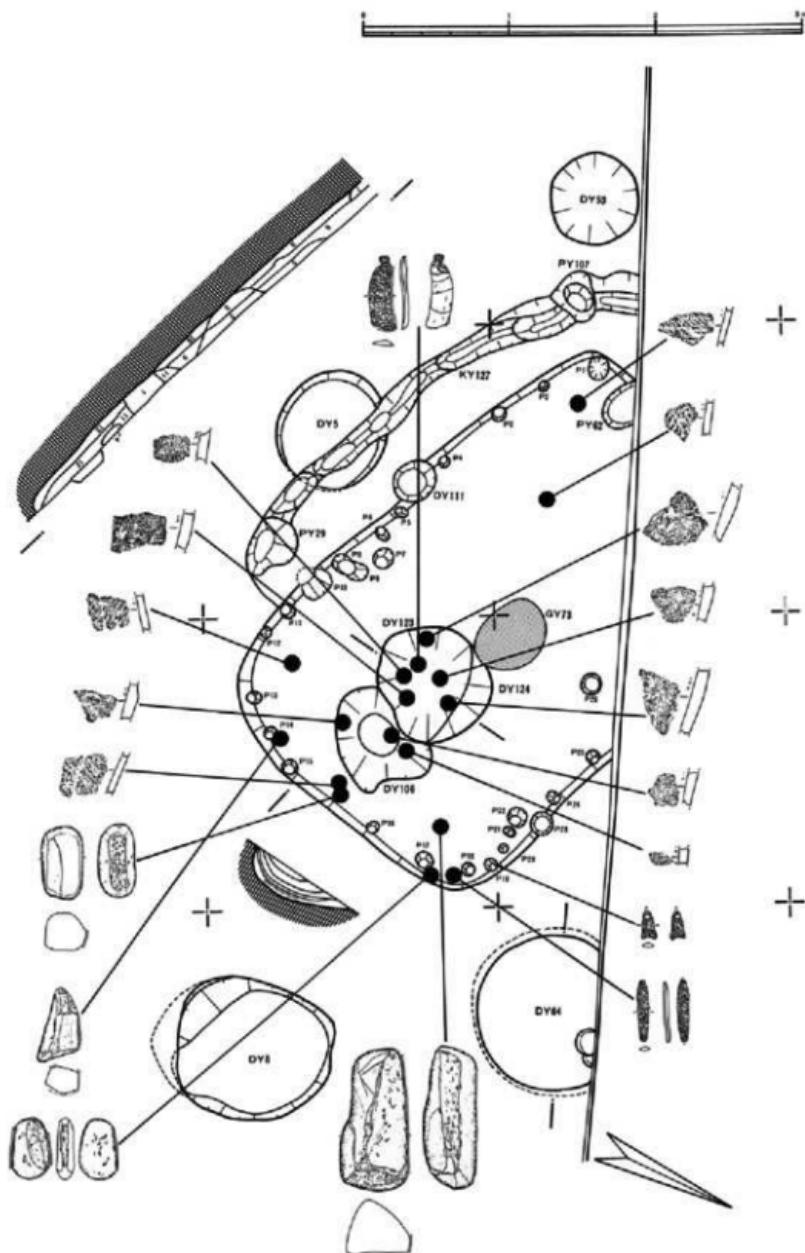
炉跡—住居跡の中央に55cm×40cmの楕円形の地床炉として認められた。後述するHY51、HY52の様に掘り込んではいるなく、3cm位の高まりを呈していた。

土壌—DY123、DY124、DY106の3期が床面に切り合い関係を示しながら認められた。内部からは石匙1点とともに撚糸文を主体とした土器片26点が検出され、木炭・焼土が大量に含まれていた。住居跡に付随する遺構（炉跡に関連する）と考えたい。

出土遺物—撚糸文を中心とした土器片32点と礫器4点、石匙1点、北東壁から小形の石槍（尖



第3図 法符寺道路造構全体図(1)



第4図 法将寺HY50平面図

頭器) 1点、P19から石錐1点それに西壁寄りに0.3cm~3cm位の剥片200点が検出されている。

時期決定—織維を多量に含むRの撚糸文、ループ文、L [R] の前々段4本多条縄文から縄文前期頭に位置付けられる。

H Y51 (第3図、第5図、第1図版、第2図版)

G25~27-3~5Gの範囲より検出した。北東コーナーの一部をH Y52によって切られ、同じ様に北西コーナー、北壁、南壁も中期の土壌D Y1、D Y2、D Y23に切られているが、平面プランは明瞭に確認される。

平面形状—正方形に近い隅丸方形プランを呈し、長径5.2m、短径4.1mを有する。西壁辺に比べ東壁が短く、両端が外に僅かに張り出す特質がある。

壁—北壁から東壁にかけては直角に近く立ち上るのに対し、南壁と西壁は比較的ゆるやかに立ち上る。地形全体が南西から北東にかけてゆるやかに傾斜していることもあって、南壁から西壁は10cm~27cmと深く、北側から東壁は12cm~13cmと浅くなっている。

柱穴—壁下に沿ってP1~P24の24基が認められた。径5cm~15cm、深さ10cm~18cmと平均的に配されている。柱穴間は北側と西側が30cm~50cm位であるものの、東から南、ことに南側に面した柱穴間は15~175cmと不規則である。おそらくP23とP24の間に入口が設していたものとみられる。

炉跡—南壁に接して認められた。長径115cm、短径70cmの楕円形を呈する底面には木炭と焼土片が混在して検出された。我々は炉跡と断定しているが、先のH Y50や後述するH Y52の様に炉床が赤褐色に変化する焼性痕が認められないことから土壌的要素を有するのかも知れない。

土壌—南北寄り70cm×66cmの円形状落ち込みがみられる。深さ5cmと浅く、遺物も検出されなかった。床面から掘り込んだものであり、住居跡に併う施設と考えたい。

出土遺物—床面に貼り付く様に19点の土器片と石匙1点、剥片23点が、東壁からP Y26付近と西壁寄りに検出されている。土器片はすべて少破片であり、ことに東壁付近からは同一個体の破片が廃棄されたごとく出土している。

年代決定—ループ文、「ハ」状文等からみて縄文前期初頭の川上名II式、室浜式位に平行するものと思われる。

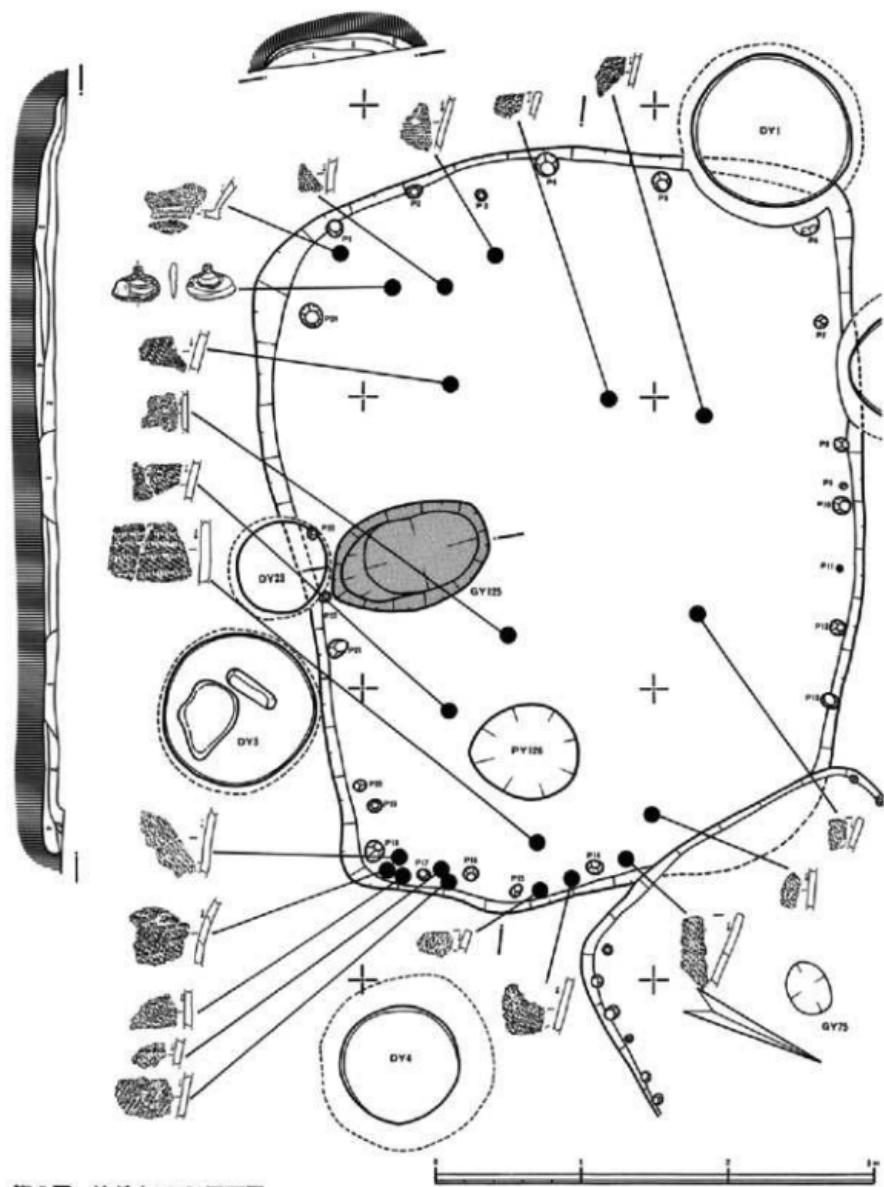
H Y52 (第3図、第6図、第1図版、第2図版)

G26~29-4~6Gにかけて検出された。H Y51を切って構築したものである。

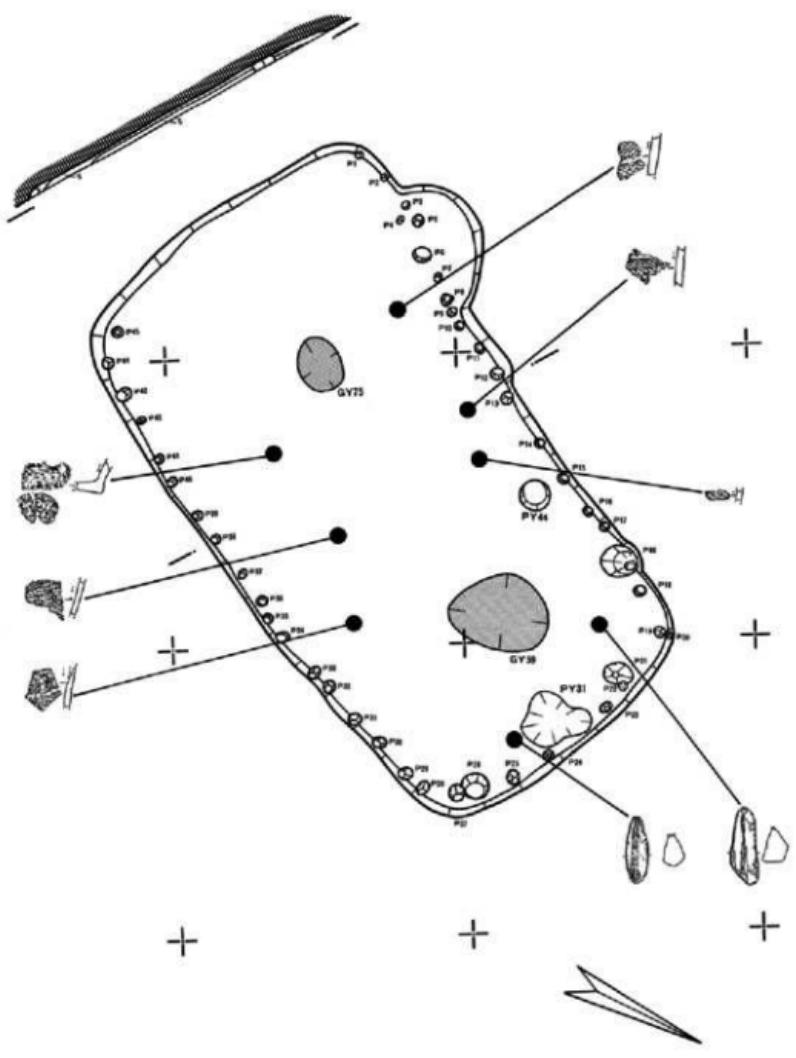
平面形状—南北に細長い長径4.97m、短径2.45mの隅丸長方形プランを呈し、西壁の一部が不自然に半円形状の張り出しをもっている。

壁—全体的に浅く、平均4cmをなすがプランは明瞭に認められた。

柱穴—南壁を除く壁下に10cm~30cmの短い間でP1~46の46基が検出、今回検出された住居跡



第5図 法将寺HY51平面図



第6図 法将寺HY52平面図

の中では最も多い。柱穴の大きさは3cm~10cm、深さ6cmを有し、壁面にくい込む様に配列されている。

炉跡—南と北寄り中央に2基の地床炉が存在する。南に位置するG Y75は40cm×30cm、深さ3cmの楕円形を呈し、北側のG Y59は長径70cm、短径55cm、深さ7cmの僅かな凹を有する不整楕円形炉であり、両者とも赤褐色に焼けた痕跡を示していた。

出土遺物—土器片6点と礫器2点の計8点が床面から認められた。

時期決定—結節羽状繩文、突刷文等の特徴、それにH Y51よりも新しい時期に構築したことから考え、大木1式に新しい年代が与えられる。

2) 第II層面の遺構〔第7図~第17図、第3図版~第5図版〕

今回調査した範囲でみると、G 24~26-1~6 G付近の土壤群、G 29~37-1~6 G付近の土壤群、H Y49、B Y136の住居と土壤群の集中するG 38~40-1~6 Gの三ヶ所に分けられる。第II層面の遺構群は繩文中期中葉の大木8a、8b式に求められるもので、僅かに同末期に類するものも含まれるが、今回検出された遺構等の関連を示すものではない。

a 竪穴住居跡〔第7図、第6図、第4図版〕

G 38・39-4~6にかけて確認されたものであり、道路敷地内に約半分位が加わることから西側を拡張して調査したものである。

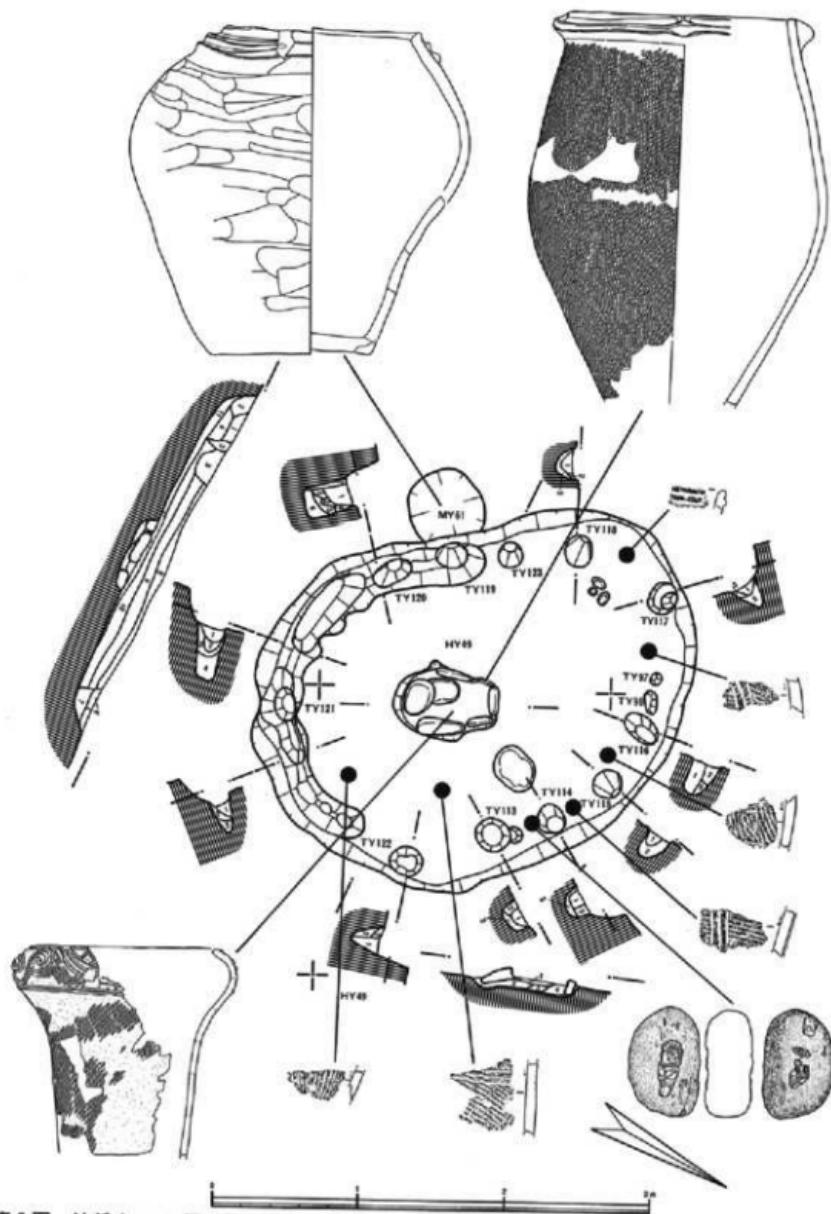
平面プラン—東西に長い楕円形を呈し、西側の一端を埋設土器(M Y61)が切っている。全体的にみると東側が広く、西側が若干窄まる特徴がある。

壁—東から北壁にかけて65°~80°の斜位に立ち上るが、南から西側にかけてほぼ直角に立ち上って北壁で20cm、南で25cm、東25cm、西22cmと平均的な深さを有するが、地形的に南西から北東にゆるやかに傾斜していることもある、西壁と南壁が特に深く意図している。

柱穴—T Y 113~T Y 123の11本を主柱として、一部西壁にT Y97、T Y98の小柱穴を複柱に用いている。柱穴の形状は円形ないし楕円形プランをなし、径20cm~25cm、深さ13cm~25cmを測り柱穴内の埋土は2~5でNo.1の様な柱痕跡を示すものが多く観察された。

周溝—20cm~30cmの幅をもって、東壁から西壁にかけて認められる。T Y 119~T Y 121の3本が周溝内部に配されているが、周溝の平均は17cm~28cmと北壁下に位置する柱穴に比べ、やや深い。傾斜面からすると、東西壁下の周溝配置は排水効果を十分に考慮して構築したものと考えられる。

炉跡—床面のほぼ中央からやや東寄りに位置する。偏平な河原石を6個と深鉢形土器を組み合せて構成するもので、床には深鉢形土器の半部位を切断して炉床に利用している。炉を構築するために掘り込んだ掘り方は南北52cm、東西75cmの楕円形であり、壁に沿って礫を配している。炉の深さは5cm、掘り方底面は7cmをなす。



第8図 法将寺HY49平面図

床面—平坦で北東部が南西側に比べ若干固い様であった。

出土遺物—炉跡（I Y94）の床面に使用された2点の深鉢形土器第19図1・2の他、凹石1点と土器破片6点が住居床面から検出されている。第19図1の特徴からすると、粘土貼付文+沈線文による渦巻文の特徴から大木8 b式でも古い時期に属するものとみられる。

b 挖立建物跡〔第7図、第9図、第3図版〕

G38・39・1～4 Gにかけて、多数の土壤とともに検出されたものである。当初土壤の一部と考え、D Y記号を用いたが、覆土の状況や遺構の構造から掘立建物跡と考えP Yの記号を用いた2者がある。ここではすでに遺構登録を行なったこともあって、併用して使用する。

平面プラン—D Y112を中心には楕円形に配してある。北端となるD Y22、P Y113を平行させてから、同様にP Y66、P Y46とP Y128、D Y58がほぼ対面する。そして北端に存する柱穴の中心と各平行する柱穴を結ぶ様に南端にD Y112を置いている。

柱穴—主軸方向に長い楕円形プランを有するもので、長径50cmのP Y128から70cmのD Y128と不規則である。深さは35cm～58cmと深く、D Y112、D Y128、D Y58、P Y113の掘り方北端に柱痕跡を確認することが出来た。柱の痕跡は15cm～21cmである。主軸長は5m、最大幅2.7mを有する。

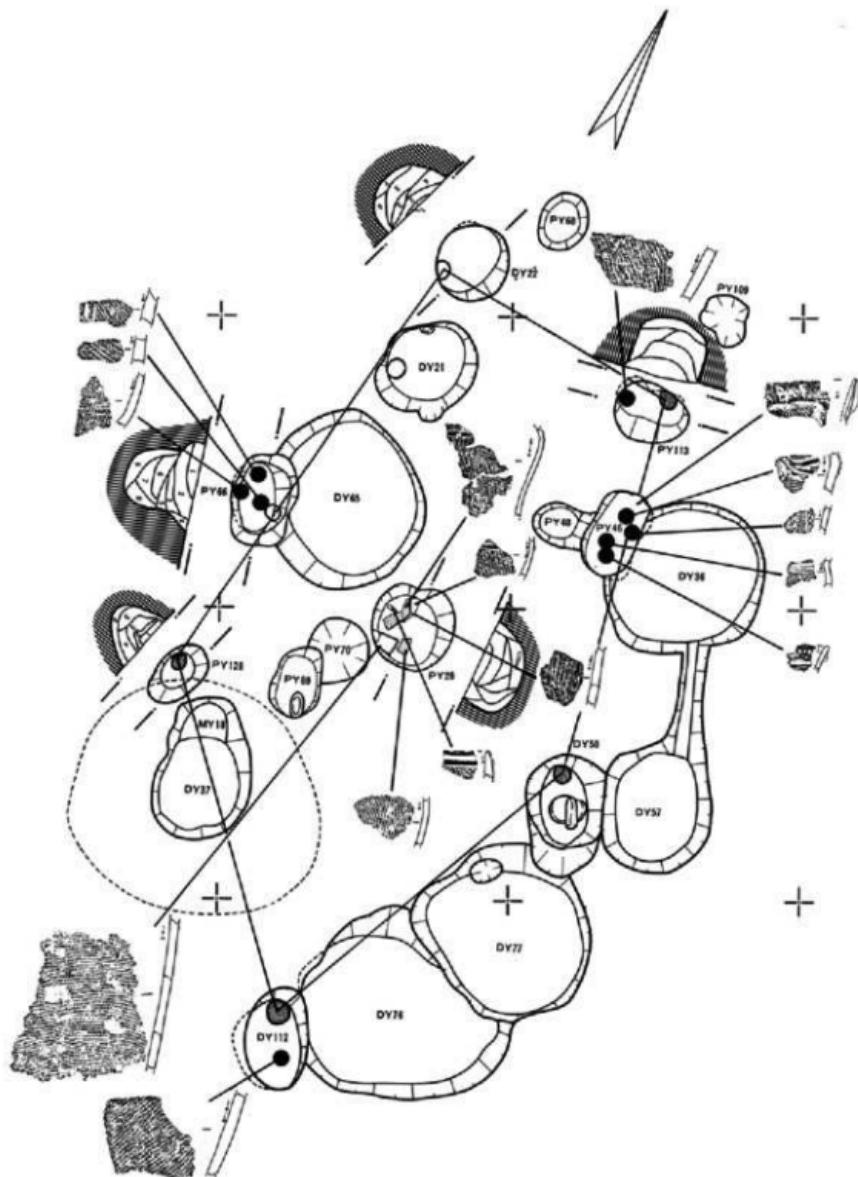
炉跡—D Y22、P Y113とP Y112を結んだ中軸線の中央に55cm×56cm、深さ32cmの炉がある。炉は土壤状を呈し、底面から内壁にかけて赤褐色に焼けた痕跡を示し、内部には二次焼成をうけた土器とともに多量の木炭、焼土が堆積していた。

出土遺物—D Y66、D Y112、D Y46、P Y113とP Y28の炉跡内から数片の土器片と石器剝片が検出されている。P Y28の炉跡を除くと何れも小破片であり、D Y66、P Y46の様に柱抜取り後に堆積したと考られる柱穴に多くみられる。年代的にはD Y46出土の多くは大木8 a式、D Y66が大木8 b式と年代決定を行うまでの資料にはならない。

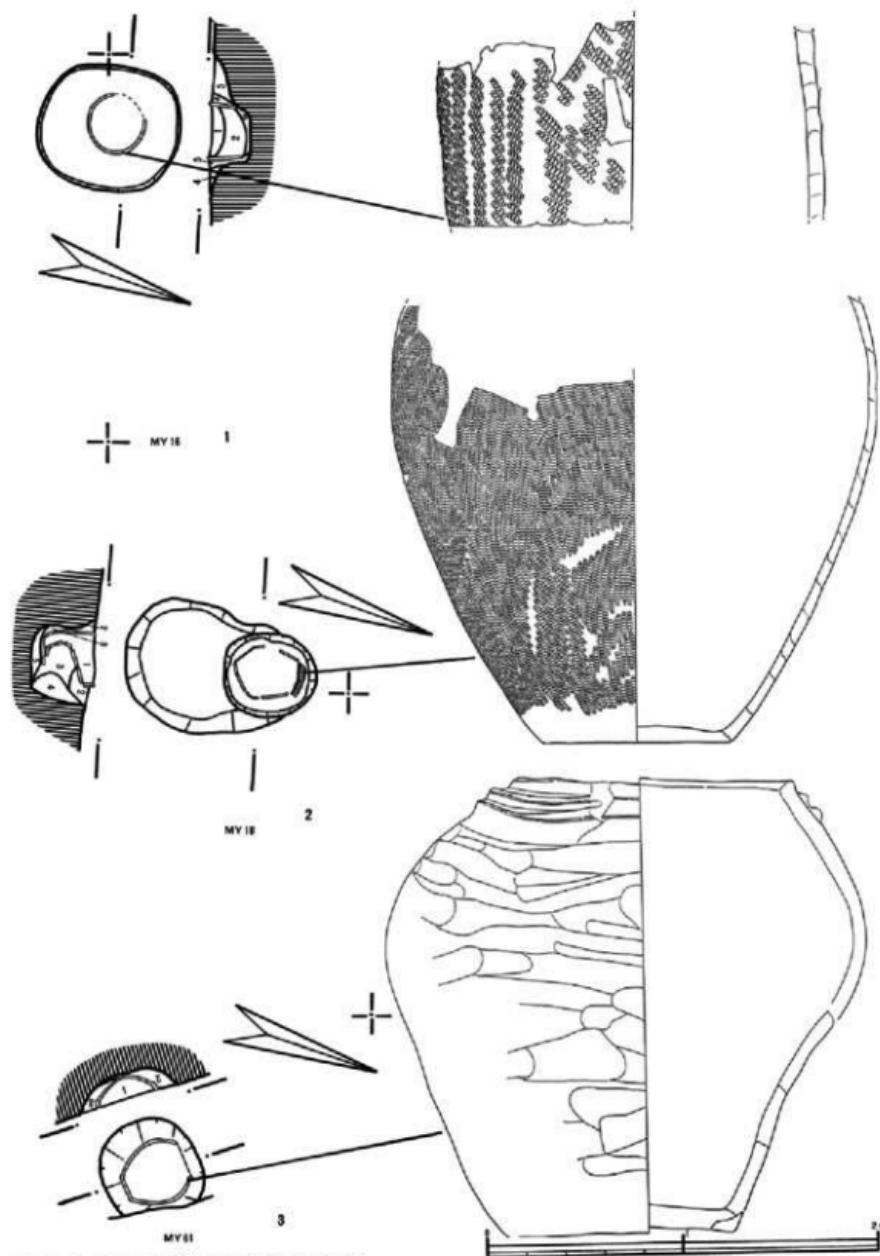
切り合い関係—D Y112とD Y76、D Y58とD Y77、D Y57、D Y46とP Y36、P Y48、P Y66とD Y65の4基が土壤、小ピットに切り合い関係を示している。この中でD Y112はD Y76を切って、D Y76をD Y77が切って、D Y58はD Y57を切り、P Y46はP Y36をP Y36をP Y66はD Y65を切っていることが判った。土壤の多くは自然堆積層を有しているものが大半で、年代を決定するまでは至っていないが、D Y76からは第29図の完形土器が検出され、大木8 aでも比較的新しい年代が与えられ、D Y77は大木8 b式でも古い年代と考えることが可能である。従ってB Y140の年代は、大木8 a式の新しい時期から大木8 b式の古い時代と求めることが出来、おそらく先のH Y49と同時期と推測するのが正しいものとみる。

c 土壌〔第3図、第7図、第11図～第17図、第5図版〕

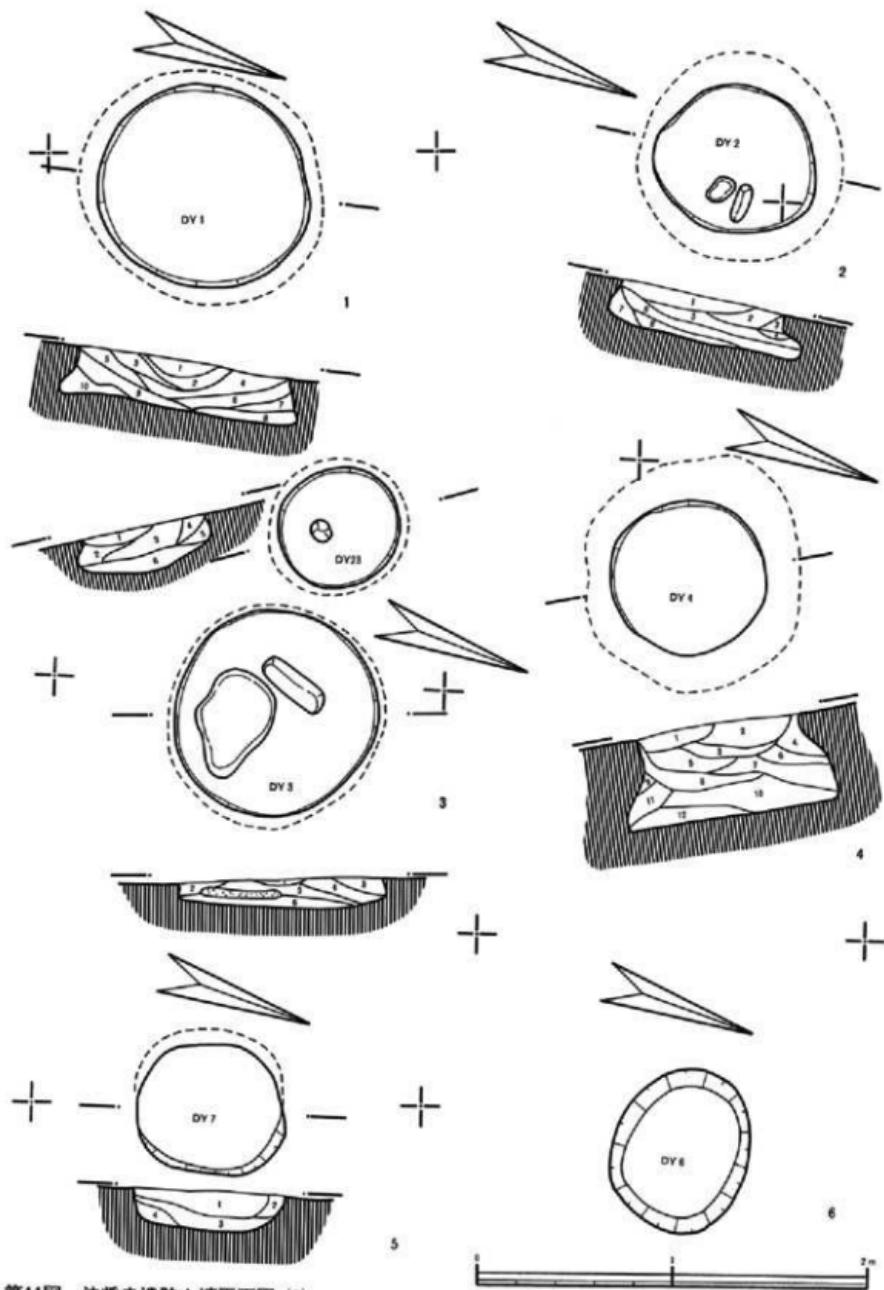
今回検出された土壤が分布状況より、3ヶ所のかたまりで分布することは先述した通りである。



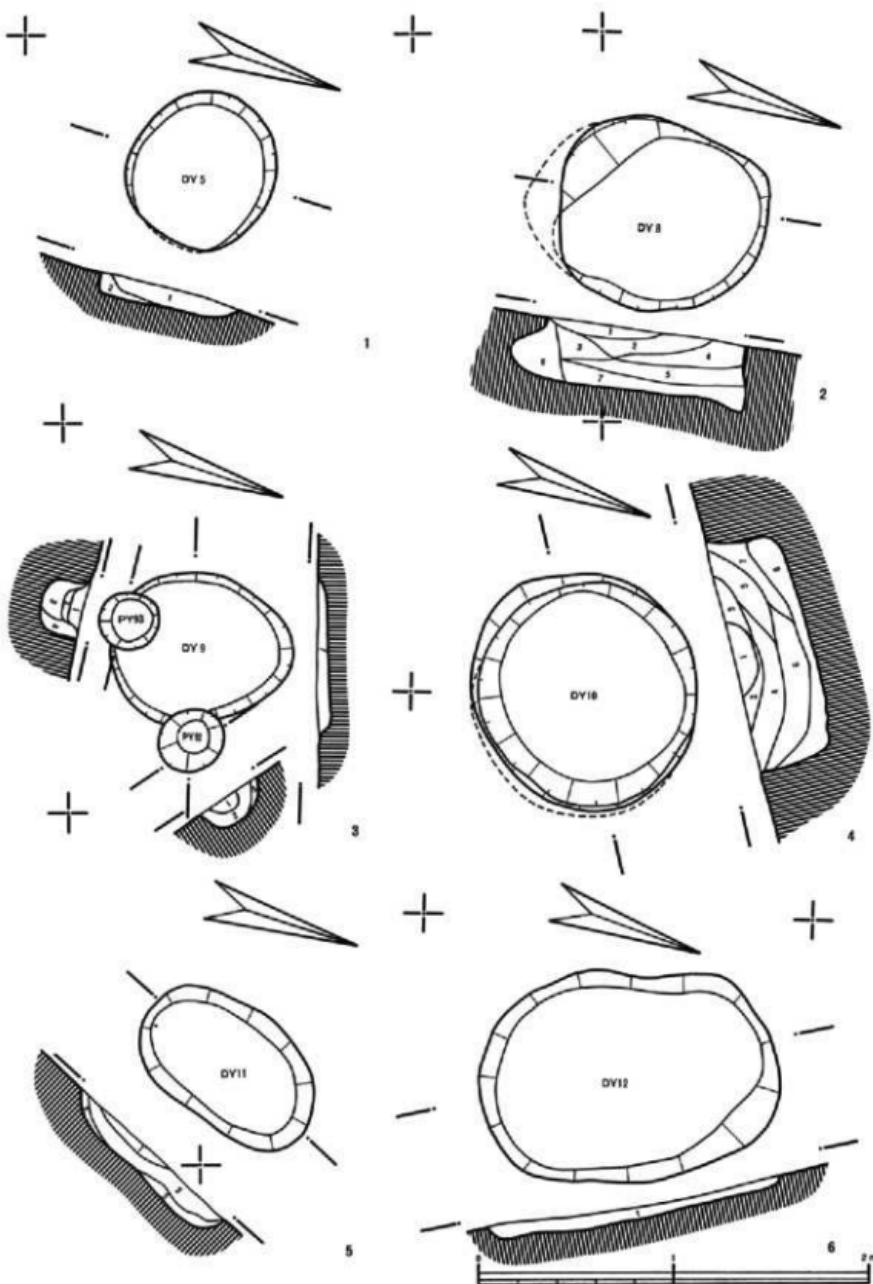
第9図 法将寺遺跡BY136平面図



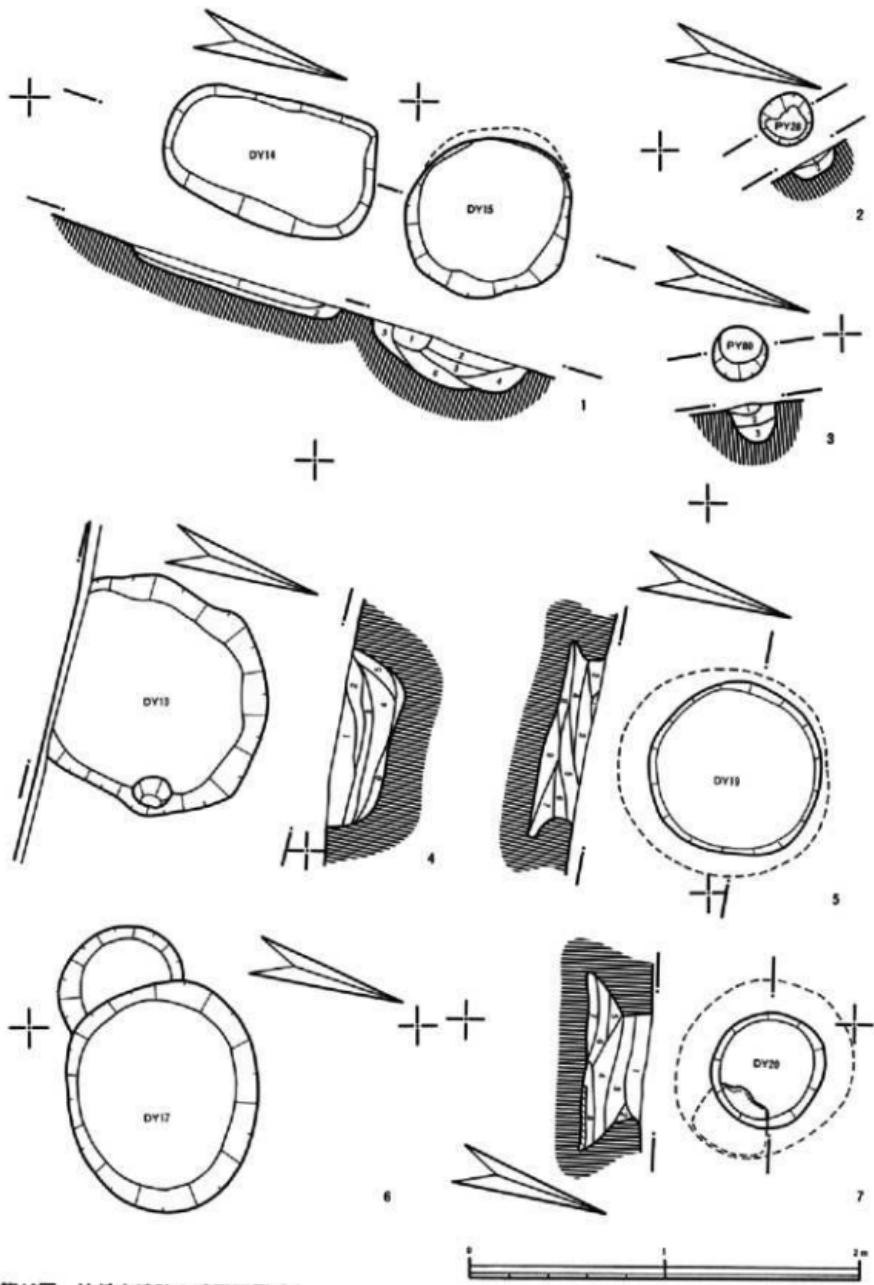
第10図 法将寺遺跡埋設土器遺構平面図



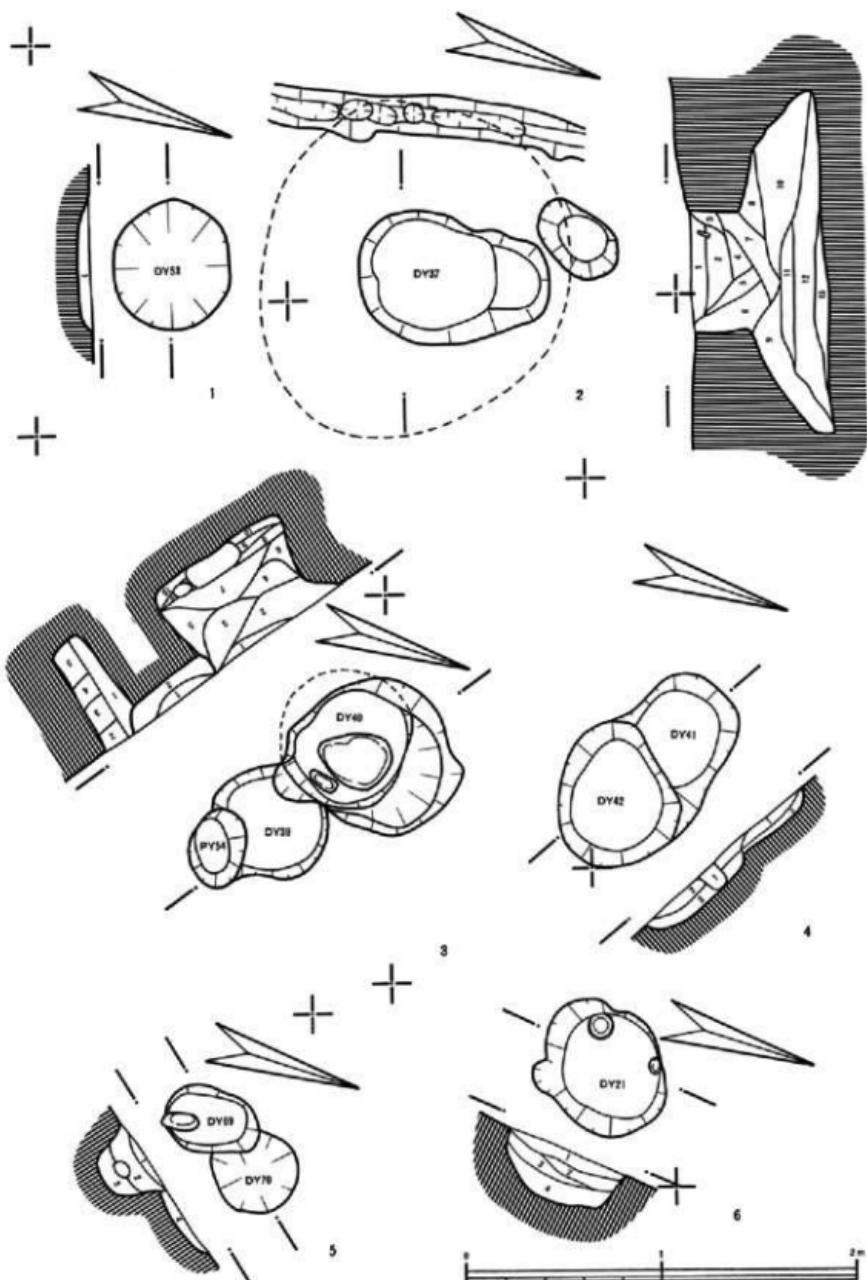
第11図 法将寺遺跡土壤平面図(1)



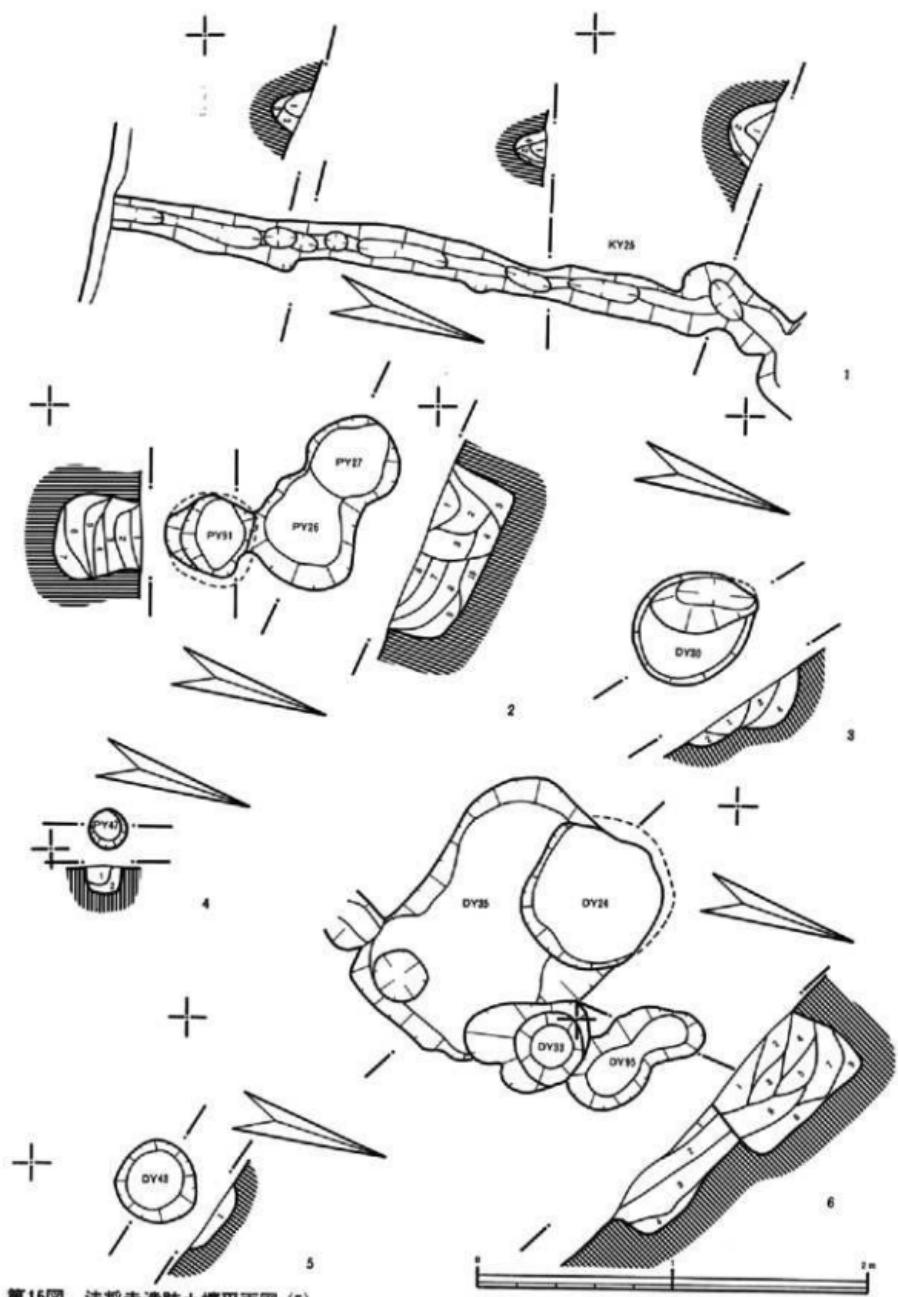
第12図 法将寺遺跡土壙平面図 (2)



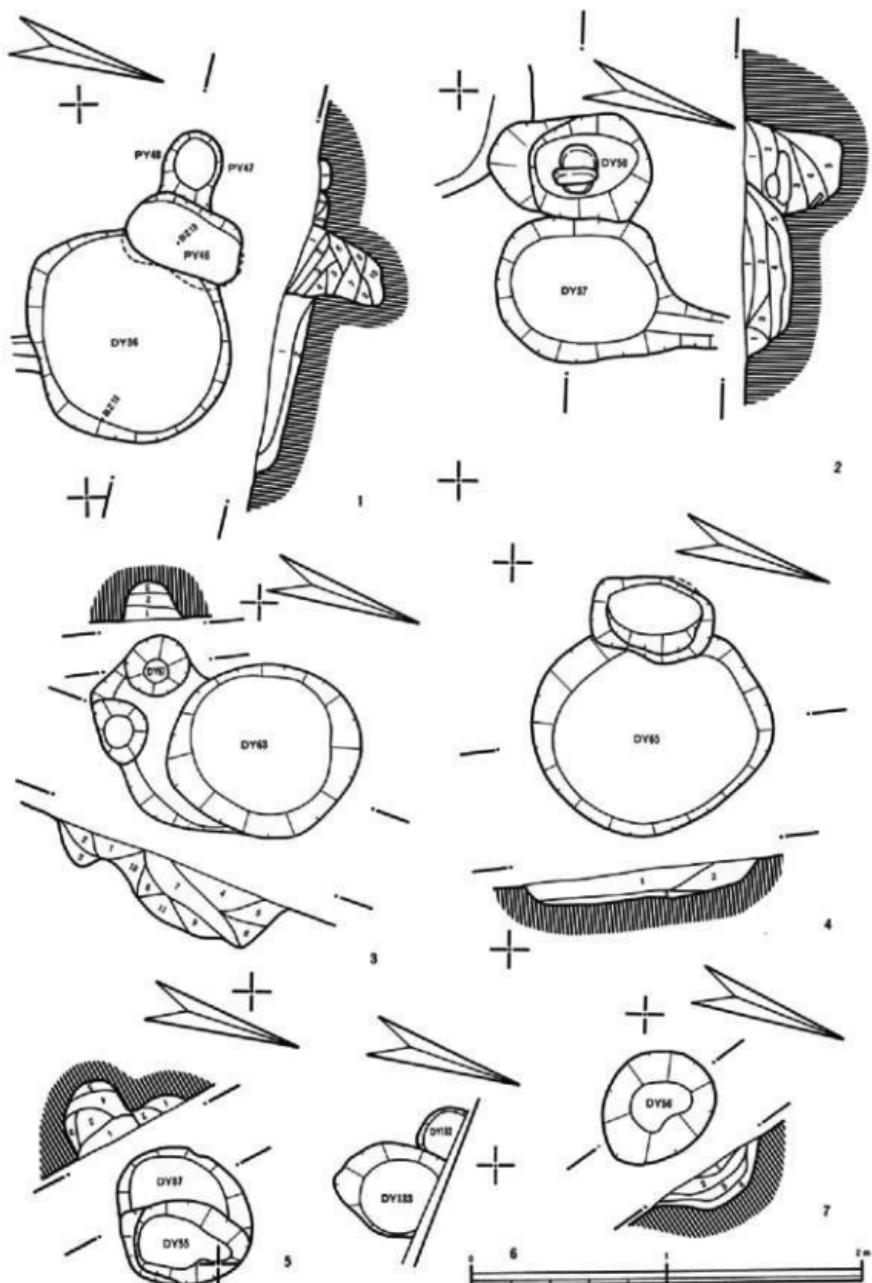
第13図 法将寺遺跡土壌平面図 (3)



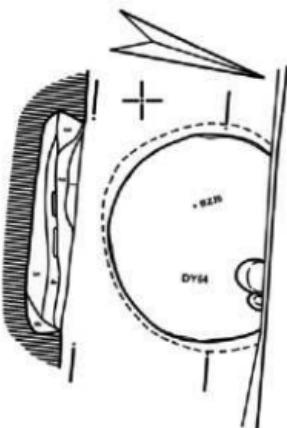
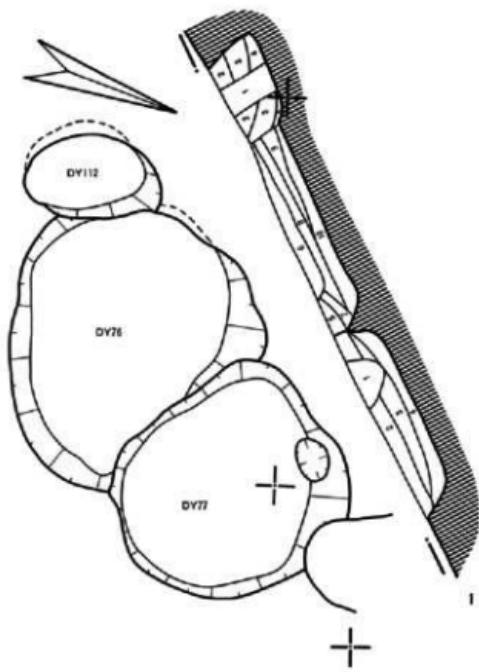
第14図 法将寺遺跡土壌平面図 (4)



第15図 法将寺遺跡土壤平面図(5)



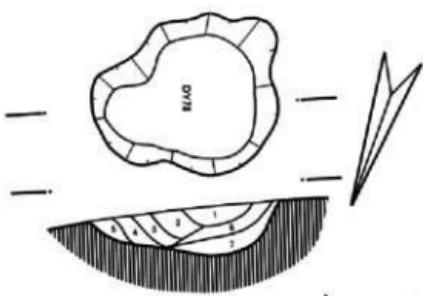
第16図 法将寺遺跡土壌平面図 (6)



+

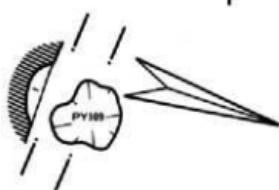
+

2



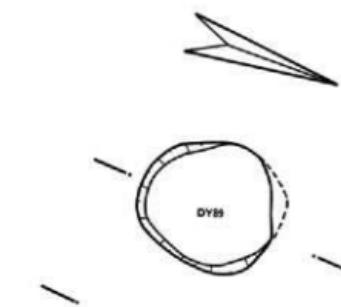
+

3



+

5



4



第17図 法将寺遺跡土壤平面図 (7)

今回検出された土壙は58基で、形状、埋土の吟味から次の3グループに大別する。

第1のグループ（自然堆積a）

深状の袋状を示すものであり、遺物は殆んど含まれず埋土は自然堆積状況を有する。DY1, DY2, DY4, DY10, DY15, DY37の6基が含まれる。

第2のグループ（自然堆積b）

土壙底面がポール状を有するものであり、DY13や、DY76の様に遺物が多く出土するものもある。先の第1のグループは、河岸段丘よりやや離れた場所を選定しているのに対し、第2のグループは段丘直上付近に多く分布する傾向がみられる。DY6, DY13, DY34, DY63, DY65 DY77, DY78, DY89の8基が検出され、埋土はすべて自然堆積土層に分類される。

第3のグループ（自然堆積c）

平面形態が円形、長方形、橢円形とさまざまであるが、全体的に7~20cm前後と浅く、遺物の含まれている割合が少ない。底面はポール状や、平坦なものが多く、比較的直角に立ち上がるものが大半である。DY5, DY9, DY30, DY17, DY14, DY12, DY21, DY23, DY53 DY33, DY36, DY39, DY41, DY42, DY43, DY81, DY87, DY125, DY88, DY123 DY124の21基があり、すべて自然堆積を示す。

第4のグループ（人工堆積a）

袋状を呈し、浅く内部に人頭大の円碟を設するグループで、人工的堆積を示す。DY3, DY20, DY40, DY64の4基がある。

第5のグループ（人工堆積b）

先の第1のグループに類する。袋状を有し、比較的深く人工的堆積を示すもの。DY7, DY8, DY19, DY76の4基がある。遺物はDY7の第20図3やDY76の第20図1の様に遺物が底面に沿って認められた。

第6のグループ（人工堆積c）

ゆるやかなポール状や底面が平坦で直角的に立ち上り、且つ人工的堆積状況を示す土壙を一括した。この中には底面から異形の石匙を検出したDY11や玉1点を検出したDY55らが含まれているが、遺物の出土は少ない。DY35, DY56, DY57, DY11, DY55, DY98, DY99, DY105, DY114, DY128の10基が含まれる。

以上の4グループに分けたが、第II層の土質が一部シルト質を有していることで、第2のグループや第6グループの中には袋状形態が崩れてポール状や皿状を示していることも十分考慮される。

d 土器埋設遺構〔第3図、第7図、第10図〕

縄文中期中葉期に位置するものでMY16, MY18, MY61の3基がある。初めのMY16はHY

52上面を掘り込んで存在するものであり、深鉢形土器の口縁部と底部を切断して胸部のみを74cm×68cm、深さ22cmの円形竪穴に設置するものであるが、木炭、焼土が認められることから炉跡に併うものではない。次のM Y18はD Y37を切った長径50cm、短径44cm、深さ33cm内に深鉢形土器の口縁部を切断し、直立した状況で認められた。最後のM Y61はH Y49に切られていることより、住居跡が構築された前に設置されたものであり、甕形に近い深鉢形土器の半位を縦に切断して60cm×50cm、深さ12cmの円形土壤に埋設したものである。

e その他の遺構〔第3図、第7図、第6図、第15図〕

P Y記号で示した竪穴住居跡以外の柱穴状遺構及び不明の小ピットを有するものとK Y記号で示した溝状遺構の両者が含まれる。

前者のP Yは明らかに柱穴を呈したと推測されるP Y92、P Y93、P Y27、P Y26、P Y54、P Y32、P Y60、P Y91他と浅く性格不明なP Y70、P Y109、P Y103、P Y104他がある。

後者の溝状遺構はK Y25、K Y127の2基があり、K Y25は17cm～27cm、深さ20cm～30cmを測り、D Y34から南方向に3.5m確認された。K Y127はH Y52の南側に30cm程離れて平行して検出された溝状遺構であり、「一」状に配してあった。幅15cm～22cm、深さ19cm～22cmを有し、周溝を切ってP Y107とP Y129の2基の柱穴状ピットが存在する。

以上が今回検出された遺構の概要であるが、詳細は次の第1表法将遺跡遺構計測分類表を参照願いたい。

第1表法将寺遺跡遺構計測分類表

遺構No.	長径	短径	深さ	平面形	遺 物	層位	遺構No.	長径	短径	深さ	A 自然堆積		B 人工堆積	
											遺構	層位	平面形	遺 物
D Y 1	110 (125)	102 (123)	29	円 形	土器片4点	10枚A	D Y 17	120	97	17	椭 圆 形	スクリーパー1点 土器片23点	3枚A	
D Y 2	85 (107)	77 (105)	25	円 形	壺器2点	8枚A	M Y 18	?	45	28	円 形	壺器1点	5枚B	
D Y 3	106 (115)	103 (113)	15	円 形	石 1点、壺器2点 土器片4点	6枚B	D Y 19	88 (113)	85 (106)	32	円 形	土器片20点	9枚B	
D Y 4	80 (120)	80 (118)	48	円 形	土器片3点、刮削片3点	12枚A	D Y 20	58 (95)	57 (84)	46	円 形	ナシ	8枚B	
D Y 5	77 (80)	74	13	円 形	刮削片2点	2枚A	D Y 21	73	60	29	椭 圆 形	土器片7点	4枚A	
D Y 6	84	70	14	椭 圆 形	土器片1点	4枚A	D Y 22	52 (56)	48	30	円 形	ナシ	7枚B	
D Y 7	77 (72)	66	23	椭 圆 形	土器片2点、刮削片3点	4枚B	D Y 23	62 (72)	60 (70)	20	円 形	刮削片1点	6枚A	
D Y 8	105 (125)	95	34	不整椭圆形	土器片8点	7枚B	D Y 24	72 (80)	67 (74)	49	不整椭圆形	土器片2点	9枚A	
D Y 9	95	75	9	椭 圆 形	ナシ	1枚A	K Y 25	(350)	17-27	29-30				
D Y 10	125 (130)	115 (122)	48	円 形	石像1点、土器7点	8枚A	P Y 26	55	52	37	不整椭圆形	土器片2点	3枚A	
D Y 11	100	62	15	椭 圆 形	石七1点	3枚B	P Y 27	50	40	37	円 形	土器片6点	5枚A	
D Y 12	153	107	10	椭 圆 形	ナシ	1枚A	P Y 28	56	55	32	円 形	土器片8点	枚B	
D Y 13	?	113	29	椭 圆 形	打製石片1点、石核1点 壺器1点、土器片28点	6枚A	P Y 29	45	30	23	不整椭圆形	ナシ	8枚A	
D Y 14	110	64	12	長 方 形	ナシ	2枚A	D Y 30	67 (72)	55	25	不整椭圆形	土器片1点	4枚A	
D Y 15	90	80 (87)	22	円 形	壺器1点、土器片1点	6枚A	P Y 31	48	40	12	不整椭圆形	土器片5点、壺器2点		
MY 16			15		埋設土器1点	2枚B	P Y 32	61	40	27	椭 圆 形	土器片10点、壺器1点	8枚A	

遺物No.	長径	短径	深さ	平面形	遺物	層位	遺物No.	長径	短径	深さ	平面形	遺物	層位
D Y 33	65	45	50	不整圓形	土器2点。製片2点	3枚A	P Y 85	30	27	15	円 形	ナ シ	5枚B
D Y 34	?	?	29	不整圓形	土器片1点	1枚A	P Y 86	?	48	29	円 形	土器片1点	2枚A
D Y 35	110	?	32	不整圓形	土器1点	4枚B	D Y 87	?	64	14	円 形	ナ シ	9枚A
D Y 36	120	100	13	円 形	石核1点。製片3点	2枚A	D Y 88	63	55	22	円 形	ナ シ	6枚A
D Y 37	70	67	71	楕 圆 形	石核2点。土器片7点	13枚A	D Y 89	70	68	28	不整圓形	土器片1点	
D Y 38	67	53	21	円 形	ナ シ	2枚A	P Y 90	20	15	28	橢 圆 形	ナ シ	7枚B
D Y 39	?	60	9	円 形	土器片5点	2枚A	P Y 91	45	42	44	不整圓形	ナ シ	3枚A
D Y 40	(80)	57	52	不整圓形	製片石器1点。土器片6点	10枚B	P Y 92	35	32	16	円 形	ナ シ	4枚B
D Y 41	?	53	10	楕 圆 形	土器片1点	2枚A	P Y 93	30	27	21	円 形	ナ シ	
D Y 42	76	63	15	不整圓形	ナ シ	3枚A	P Y 94	72	51	8	橢 圆 形	ナ シ	
D Y 43	33	31	10	円 形	土器片4点	1枚A	P Y 95	?	27	29	橢 圆 形	ナ シ	5枚B
P Y 44	22	21	13	円 形	ナ シ		P Y 96	22	22	26	円 形	ナ シ	
P Y 45	56	47	9	楕 圆 形	ナ シ		P Y 97	9	7	5	橢 圆 形	ナ シ	
P Y 46	60	35	46	楕 圆 形	石匕1点。土器片2点	10枚B	T Y 98	16	8	11	橢 圆 形	ナ シ	4枚B
P Y 47	20	18	14	円 形	土器片1点	2枚B	D Y 99	50	47	13	円 形	ナ シ	2枚A
P Y 48	35	28	15	楕 圆 形	ナ シ	3枚A	P Y 100	(30)	27	17	橢 圆 形	ナ シ	
H Y 49	312	227	20~25	不整圓形	定形土器2点。土器片6点。石器1点。	枚A	T Y 101	?	11	7	橢 圆 形	ナ シ	
H Y 50	362	228	5~13	開丸長方形	石核1点。尖頭器1点。石器4点。土器片22点。石匕1点。チップ22点	枚A	T Y 102	18	18	11	円 形	ナ シ	
H Y 51	515	412	10~18	開丸方形容	石匕1点。尖頭器1点。石器4点。土器片22点。石匕1点。チップ22点	5枚A	P Y 103	?	12	12	橢 圆 形	ナ シ	5枚B
H Y 52	497	245	2~5	開丸長方形	橢器2点。剥片7点。土器片6点	3枚A	P Y 104	28	27	27	不要楕 圆 形	ナ シ	9枚B
D Y 53	63	50	7	円 形	土器片7点	1枚A	D Y 105	?	15	15	橢 圆 形	ナ シ	9枚B
P Y 54	41	32	55	楕 圆 形	ナ シ	5枚B	D Y 106	75	22	不要楕 圆 形	土器片2点		
D Y 55	65	45	32	不整圓形	ナ シ	5枚B	P Y 107	35	33	38	不整圓形	土器片1点	
D Y 56	65	53	23	楕 圆 形	石核1点。土器片3点	4枚B	P Y 108	?	22	13	円 形	ナ シ	1枚A
D Y 57	92	74	25	楕 圆 形	土器片5点	5枚B	P Y 109	30	25	10	不整圓形	ナ シ	
D Y 58	85	53	51	楕 圆 形	橢器1点。土器片9点	5枚B	P Y 110	30	29	7~34	円 形	ナ シ	
G Y 59	70	55	7	不整圓形	ナ シ		D Y 111	80	?	18	円 形	ナ シ	
P Y 60	90	35	27	楕 圆 形	ナ シ	4枚A	D Y 112	71	(52)	35	橢 圆 形	土器片1点	4枚B
M Y 61	?	50	11	円 形	楕器土器片1点。土器片8点	2枚B	P Y 113	52	41	50	橢 圆 形	土器片1点	3枚B
P Y 62	?	25	10	楕 圆 形	石製品1点。土器片1点	2枚A	D Y 114	?	37	18	橢 圆 形	ナ シ	3枚B
D Y 63	103	87	38	楕 圆 形	橢器1点。土器片1点	11枚A	T Y 115	20	18	30	橢 圆 形	ナ シ	2枚B
D Y 64	105	100	23	円 形	スレーパー2点。橢器1点。土器片27点	5枚B	T Y 116	26	16	21	不整圓形	ナ シ	3枚B
D Y 65	117	107	15	楕 圆 形	ナ シ	3枚A	T Y 117	22	20	15	不整圓形	ナ シ	3枚B
D Y 66	62	42	58	不整圓形	土器片5点	9枚B	T Y 118	22	19	37	橢 圆 形	ナ シ	3枚B
P Y 67	32	26	26	円 形	ナ シ	3枚A	T Y 119	21	?	33	橢 圆 形	ナ シ	
P Y 68	42	32	30	楕 圆 形	ナ シ	2枚A	T Y 120	28	?	31	不整圓形	ナ シ	6枚B
P Y 69	50	33	30	楕 圆 形	橢器1点。土器片2点	3枚A	T Y 121	25	18	45	不整圓形	ナ シ	
P Y 70	?	42	7	円 形	ナ シ	1枚A	T Y 122	22	20	23	円 形	ナ シ	3枚B
P Y 71	30	25	31	円 形	ナ シ	2枚B	D Y 123	80	62	8	不整圓形	ナ シ	5枚A
P Y 72	25	17	10	楕 圆 形	ナ シ	3枚A	D Y 124	76	?	6	不整圓形	ナ シ	1枚A
G Y 73	55	40	+ 3	楕 圆 形	ナ シ	4枚A	G Y 125	115	70	13	橢器1点	ナ シ	3枚A
P Y 74	26	22	19	楕 圆 形	ナ シ		D Y 126	77	66	5	不整圓形	ナ シ	
G Y 75	40	30	3	円 形	ナ シ	K Y 127	340	15~25	19~22	土器片6点			
D Y 76	148	130	27	不整圓形	橢器1点。土器片10点。石核1点。土器片1点。土器片5点	6枚B	D Y 128	49	30	58	橢 圆 形	ナ シ	6枚B
D Y 77	125	117	21	不整圓形	土器片1点。土器片10点。石核1点。土器片1点。土器片5点	4枚A	P Y 129	27	25	50	円 形	ナ シ	3枚B
D Y 78	105	82	24	不整圓形	土器片1点	7枚A	P Y 130	27	17	10	橢 圆 形	ナ シ	
P Y 79	24	16	28	楕 圆 形	ナ シ		P Y 131	(34)	32	16	円 形	ナ シ	3枚A
P Y 80	27	26	11	不整圓形	ナ シ	2枚A	P Y 132	?	22	22	円 形	ナ シ	
D Y 81	?	62	11	円 形	ナ シ	3枚A	D Y 133	?	50	41	橢 圆 形	土器片1点	
P Y 82	30	27	19	円 形	土器片1点	3枚A	P Y 134	26	25	28	円 形	ナ シ	
P Y 83	20	16	13	楕 圆 形	ナ シ	2枚A	T Y 135	24	23	23	円 形	ナ シ	
P Y 84	23	22	11	円 形	ナ シ		B Y 136						

4 出土遺物〔第18図～第36図、第6図版～第23図版〕

第II層面構造、第III層面構造と第IV層の包含層を中心に石器 317点、土器1510点の計1827点が

今回の調査で検出された。ここでは石器と土器に大別し、述べてみる。

1) 土器〔第18図～第32図、第6図版～第21図版〕

遺構、包含層出土土器群1510点の中には土壤内、埋設土器、住居内出土土器を含め10点の復元完形土器がある。本項ではこれらの土器類を一括し、時期別に大別することによって、縄文時代早期（A群土器）、縄文時代前期（B群土器）、縄文時代中期（C群土器）の三グループに分けられる。さらに単位文や文様表出技法、器形等の吟味から幾つかの細分が可能であり、以下に細別した順で述べてみよう。

a A群土器〔第30図、第31図、第16図版～第18図版、第20図版1〕

G27～32-1～7 Gの限られた範囲からの検出で、第IV層（暗黄茶褐色粘質土層）から認められた368点である。粘質土層に含まれていることもある、文様の判別できる資料は121点であった。文様構成手法から次の10類に分けた。

A群I類〔第30図1～12〕

先端の鋭利な工具で施す細状の沈線文と円形及び半円形状の突刷文の組み合せ間に貝殻腹縁压痕文を横走したもの。この仲間には沈線を平行するものと斜位に施す二通りがある。器形は口唇部が尖り、僅かに内曲気味に外反するものとみられる。田戸上層式、常世式に併行する。

A群II類〔第30図13～27、32、33〕

半截竹管による平行沈線文、斜行沈線文、横位の鋸歯状文、斜位の鋸歯状文、縦位の鋸歯状文とややゆるやかな波状文、それに一条の沈線文による横位、斜位、縦位の鋸歯状、波状沈線を主要単位文として口唇部や間に横走する貝殻腹縁連続文を組み合せたグループをまとめた。関東の田戸上層式、福島県を中心として分布する常世式に併行する。器形は、内曲気味に外反する口縁が頭部で窄まる、桑山No.4遺跡の完形土器（明神裏III式）に近いものと考えられる。

A群III類〔第30図28～31、34～41〕

一条や二条の平行沈線文を区画文として、多条斜行沈線、格子目状文を配する仲間で、田戸上層式に併行するグループとみられる。

A群IV類〔第30図42～66〕

貝殻腹縁連続文を中心に施すグループを一括した。口縁部を主体に横位、斜位の組み合せによるものであり、大寺、常世期に求めることができる。器形は外反するものが多く、頭部で段を有する第29図51もある。

A群V類〔第30図67～82、第31図39〕

半円状や円形状、それに方角状の突刷文を列点状に配するグループで、明神裏III式にみられる突刷沈線文から発展したものと考えられる。器形は平縁と大きく波状を呈する二通りがあり、両者とも外反する。

A群VI類〔第31図1～8〕

口縁部が尖状に大きく波状するのが特徴で、口唇部と頸部を中心に施文される貝殻腹縁圧痕文が縦位、横位、斜位の組み合せて配されている。この仲間には第30図1で示されている様な貼付を有するものも含まれる。全体的に口縁部が肉厚で頸部を薄くすることによって頸部との境を区画している。器形は口縁部が外反し、頸部で若干窄まり、そのまま底部に斜行するものと考えられる。常世式に併行する。

A群VII類〔第31図9～19〕

縄先端を突刷して列点状に横走するグループで、一見円形状の突刷文に見る。この手法は法将寺遺跡で初めて発見されたものであり、創草期以外での使用を示すものとして注目される。第30図9～12は絡条体の先端部での圧痕、第31図13～19はR {^b} もしくは太状の絡条体先端での突刷文で、前者は鋸歯状沈線文、後者は横位の連続短沈線文、貝殻腹縁圧痕文を加えている。器形は尖状を示す波状口縁と平縁を有する二者があり、内曲気味に外反した口縁部が頸部でくびれながら頸部でゆるやかに曲し、底部に傾下するものとみられる。常世式に併行するとみられる。

A群VIII類〔第31図20～25〕

絡条体圧痕を主体にしたグループで、6点出土している。器形はA群VI類に近いものであり、大きく波状をもつものと平縁を有するものが含まれる様である。絡条体圧痕文とともに半截竹管によるゆるやかな鋸歯文や半円形突刷文が施文する。関東地方から東北南半に分布する子母口式に併行するものと考えられる。

A群IX類〔第31図26～28〕

胴部片である。半截した竹管を用いて縦位に連続施文するもので、A群V類やA群IX類の胴部に用いられるものとみられる。

A群X類〔第31図29～38〕

無文の土器群を一括した。第31図30～35は胴部片で、A群I類～同VII類の胴部と考えられる。29は口唇部が丸味を有する口縁部片であるが、この様に全面を無文で統一するものは多くみられない。36～38は尖底部片である。36・38は第31図1～39の様な砲弾形を有する底部と推測されるが37は角度が大きく、胴部が広がって口縁部も急速に外反する器形とみられる。

b B群土器

H Y50～H Y52の堅穴住居跡床面と付近の第III層から検出された土器群を一括した。今回検出された土器群の中では最も少なく、胎土に多量の纖維を含み焼成性は比較的良好である。総数126点で、次の6類に分けられる。

B群I類〔第18図5～10, 13, 14・第32図17〕

H Y50のD Y123, 124 内とその付近から検出されたR右巻の撲糸文を縦位に転回した胴部片

で八幡原No26遺跡から蕨状撲糸圧痕文、表裏繩文と併なって検出された例がある。米沢市松原遺跡からは検出されていないことから繩文前期初頭でも古い時期と考えられる。

B群II類〔第18図1～3、31、40、44・第32図5～9、18〕

斜繩文の土器群を一括した。R {^L}, L {^R } を主体に転回するものが大半を占めるが第17図1・2の様にL {^R } を示す多条繩文を有するものもある。

B群III類〔第18図4、20～29、32、35、37、39、41、42、第32図10、1、13、14〕

ループ文、結束羽状繩文のグループを一括した。ループ文はすべてR {^L } の3本多条を利用している。後の羽状繩文はL {^R } · R {^L } の二本の原体を結束するもので2点検出されている。

B群IV類〔第32図3・4〕

L {^r } の原体を圧痕するグループで、破片なので不明であるが蕨状撲糸圧痕文を有する可能性がある。関東の花積下層式、東北の上川名II式に併行する。

B群V類〔第18図33・第32図1・2〕

へラ状工具を用いて「ハ」状を施文するグループで、3点検出されている。

8群VI類〔第18図36・43・45、第32図15・16〕

半截竹管、棒状工具で連続して突刷すもので、第18図36・37・45、第32図16は底辺から底面に施行され、第18図43、第32図15は胴部に施されている。

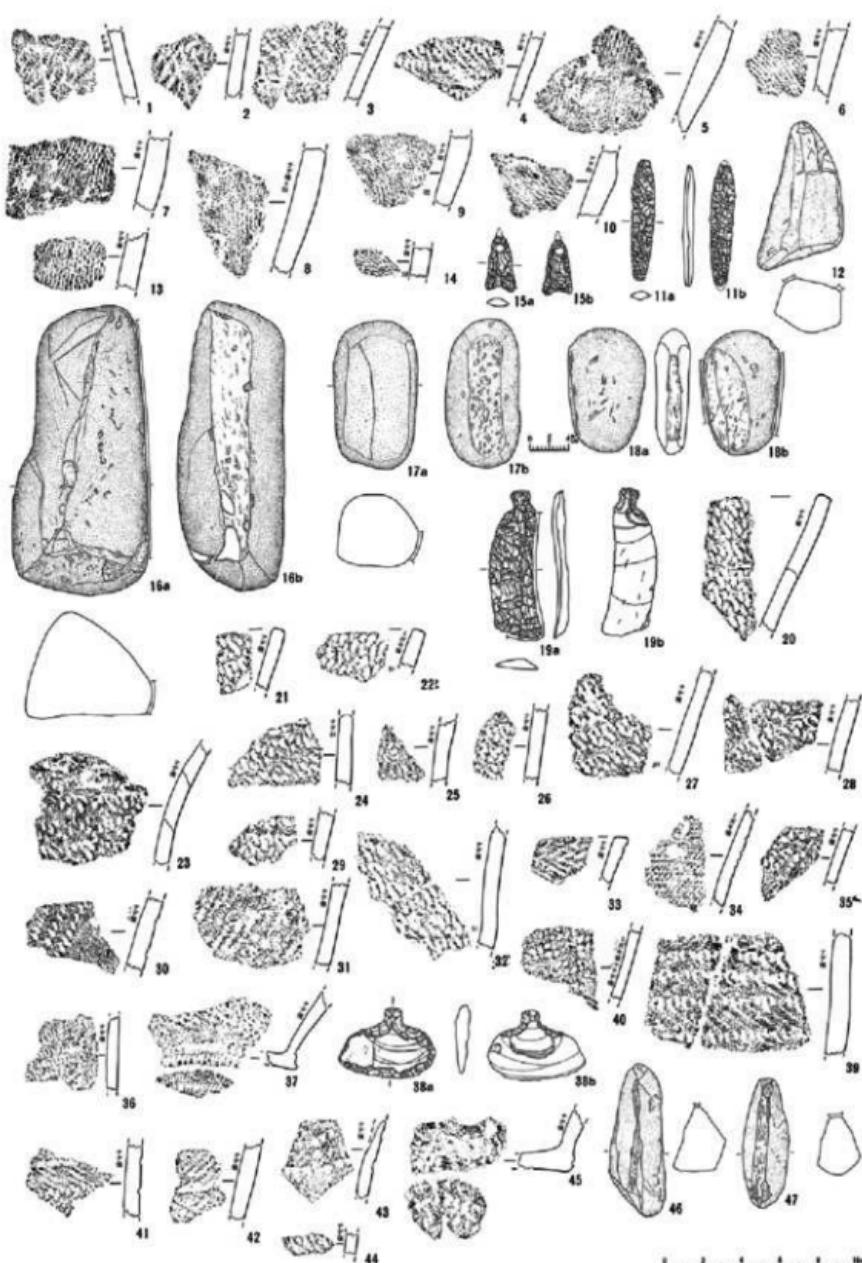
c C群土器〔第19図～第28図、第32図19～43、第7図版～第15図版、19図版〕

今回検出された土器群の中では最も多く検出されたグループで、遺構を中心に1,016点ある。この中にはH Y49の炉跡から検出した2点の完形復元の他、M Y16、同18、同61の埋設土器、土壤内より8点の完形復元土器が含まれる。本群の土器はすべて繩文中期中葉に位置付けられ、大木8a式、同8b式の2時期に分けられる。

C群I類〔第20図3、第22図1～4・7・9～11・14～19、第24図11～31、第25図2～8、14～23・26・32～35、第26図28～32・37～42・44～50・52、第27図19～25・29～31、第28図1～3・12・17～21・24、第32図19～33〕

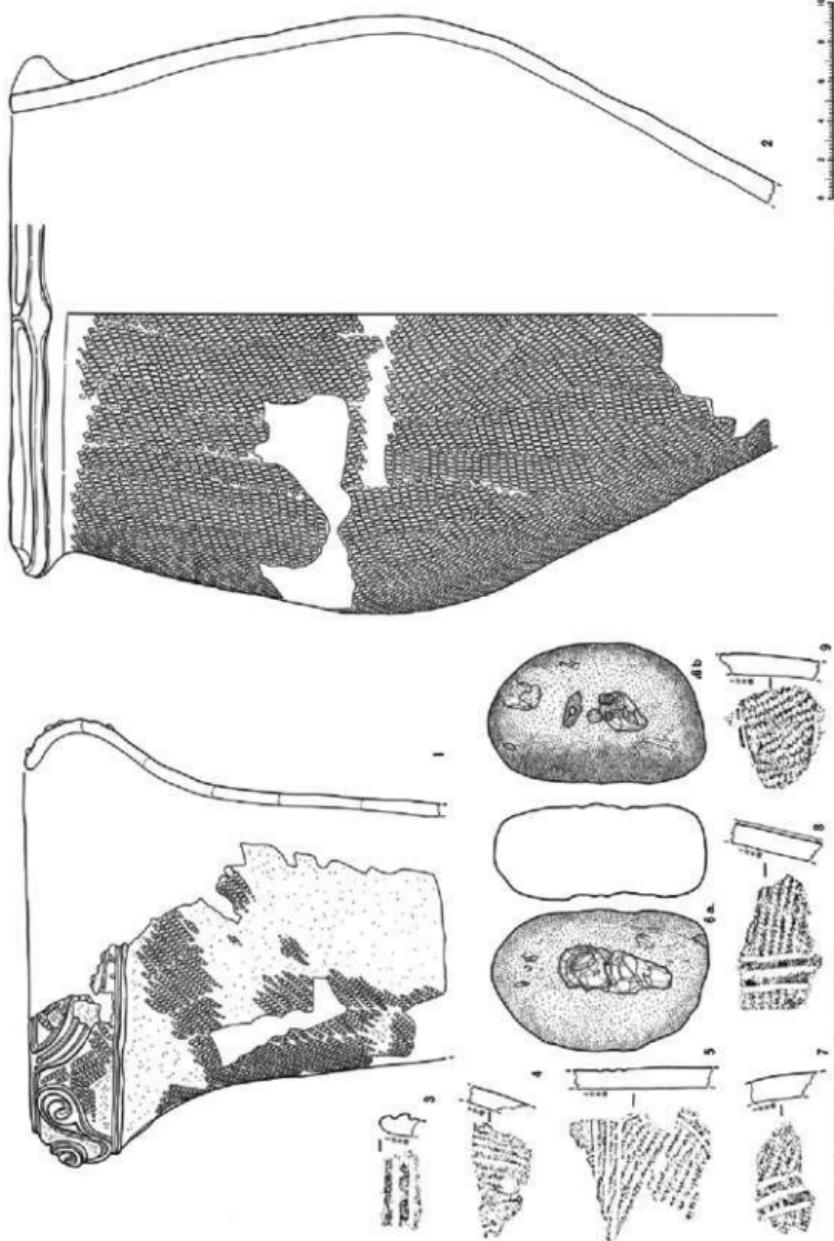
無調製の粘土貼り付け文、沈線文を地文となるR {^L } · L {^R }, R {^L } {^F } · L {^R } {^F } を施文した後に施したもので、渦巻文、「の」字状文、平行線、斜行、縦位文様がある。大半は胴部、底部等の小破片であることから全体的な文様構成は明らかに出来ないが、第19図3の様に口縁部が内曲し、胴部でふくらむキャリバーに近い器形と思われる。大木8a式の仲間を一括した。ただしこの類の多くは大木8a式でも比較的大木8b式に近い。

C群II類〔第20図1、第19図、第21図1、第22図21～28、第23図、第24図1・4・6、第25図27～30、第26図1～8・11～15・17～25・27、第27図1～14・17・18・32～39、第28図5～10・14～16・22・23、第29図、第32図34～43〕



第18図 法将寺遺跡構内出土遺物(1)

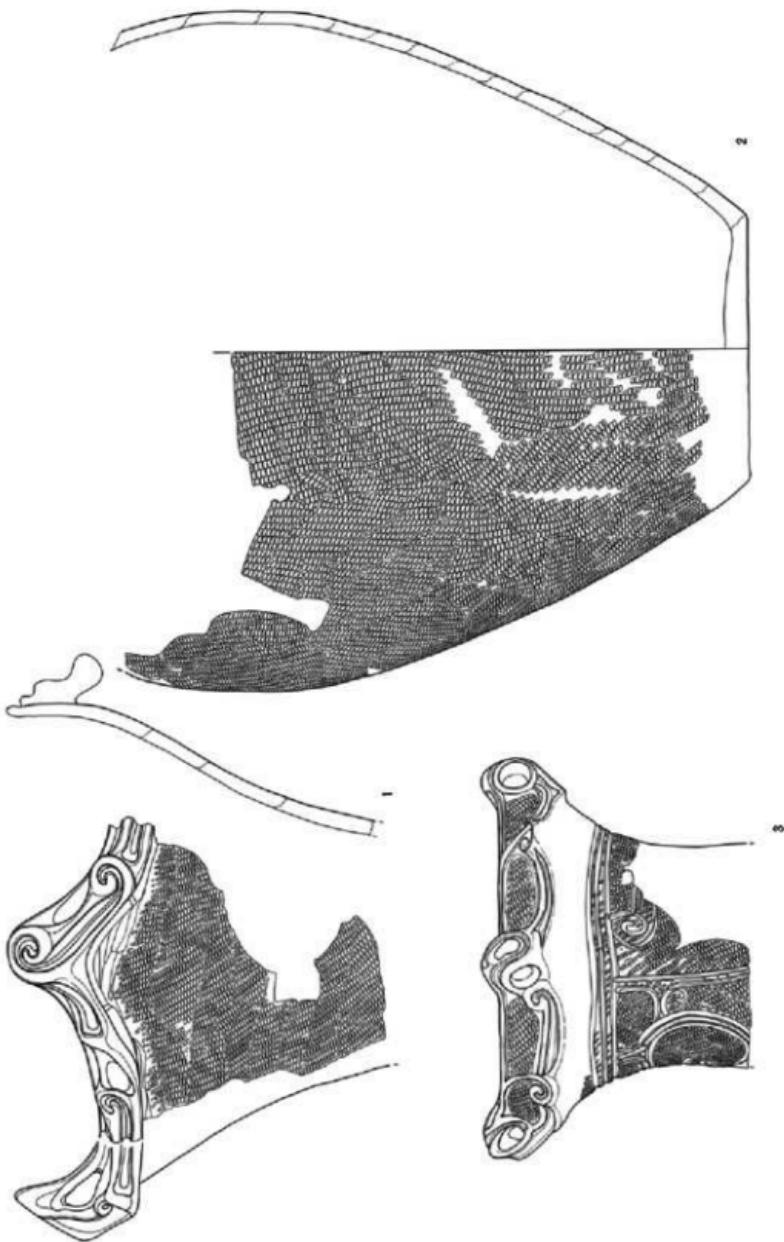
HY50出土 1~19 HY51出土 20~39
HY52出土 41~47

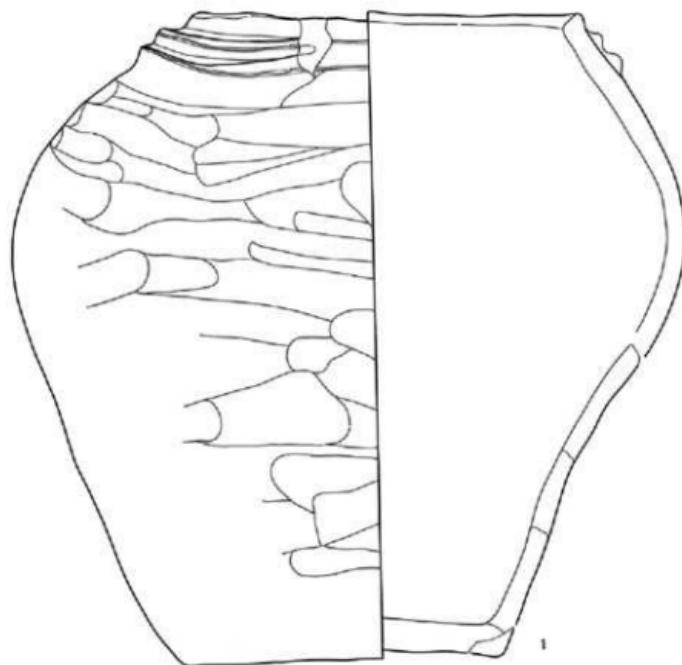


第19圖 法師寺遺跡內出土遺物(2)

DY76出土 1 NY18出土 2 DY7出土 3

第20图 法狩寺造佛造像内出土遗物(3)

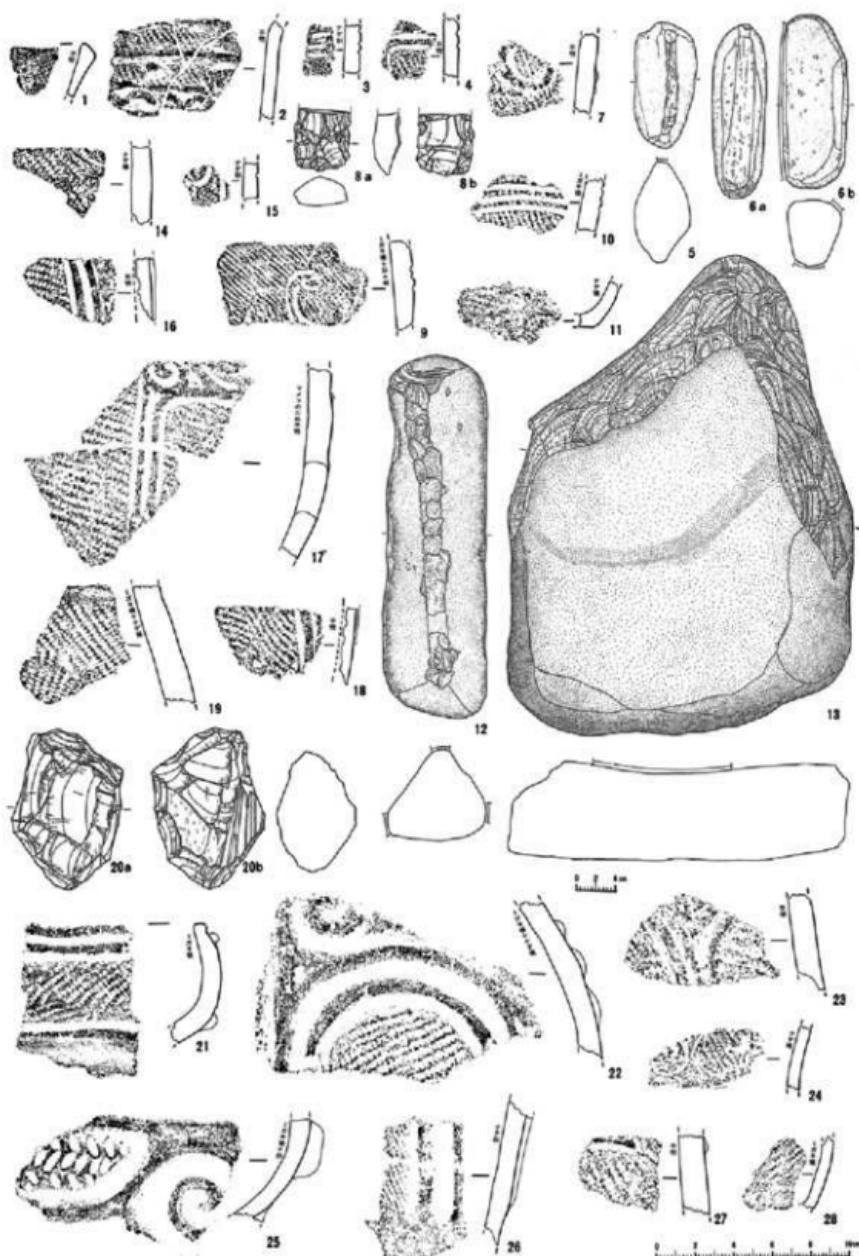




第21図 法将寺遺跡遺構内出土遺物(4)

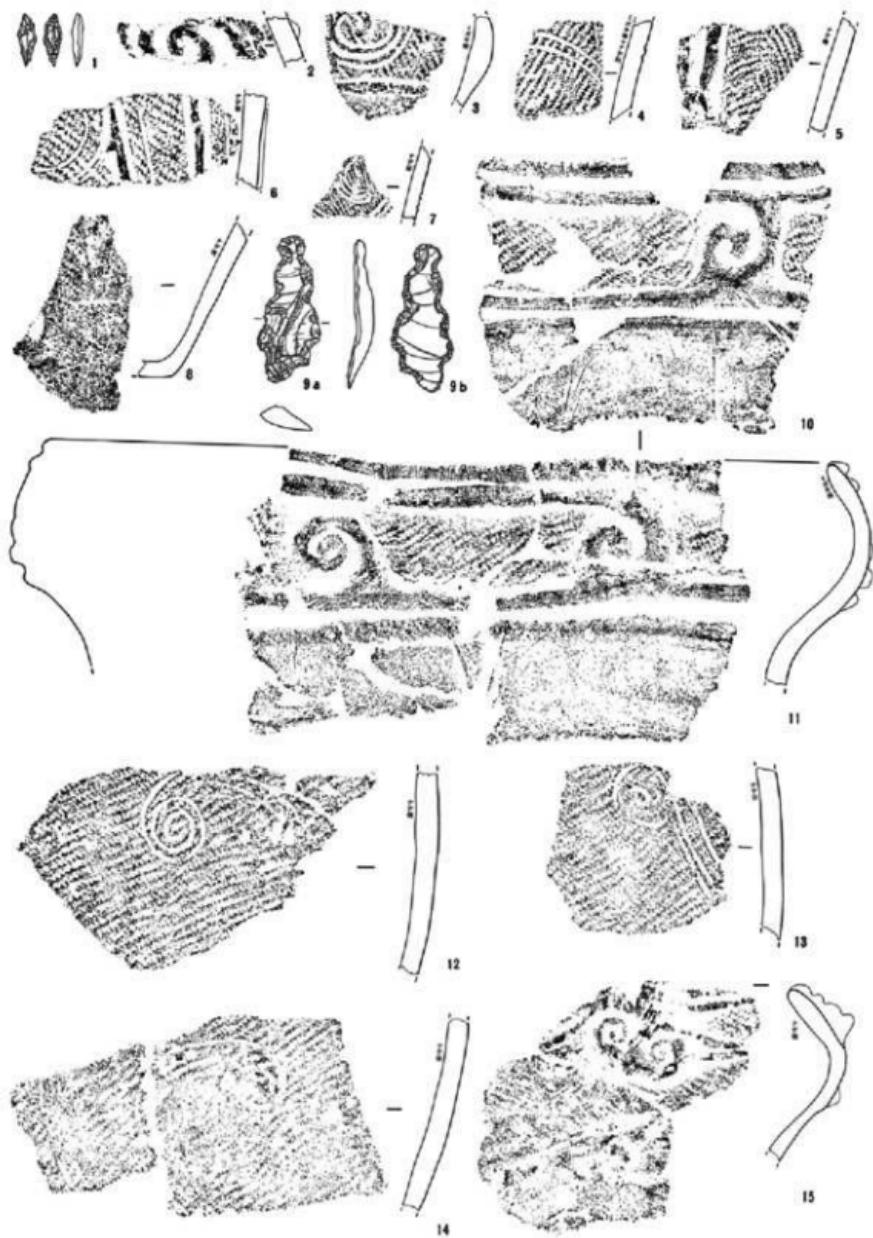
MY61出土 1 MY16出土 2

1 2 3 4 5 6 cm



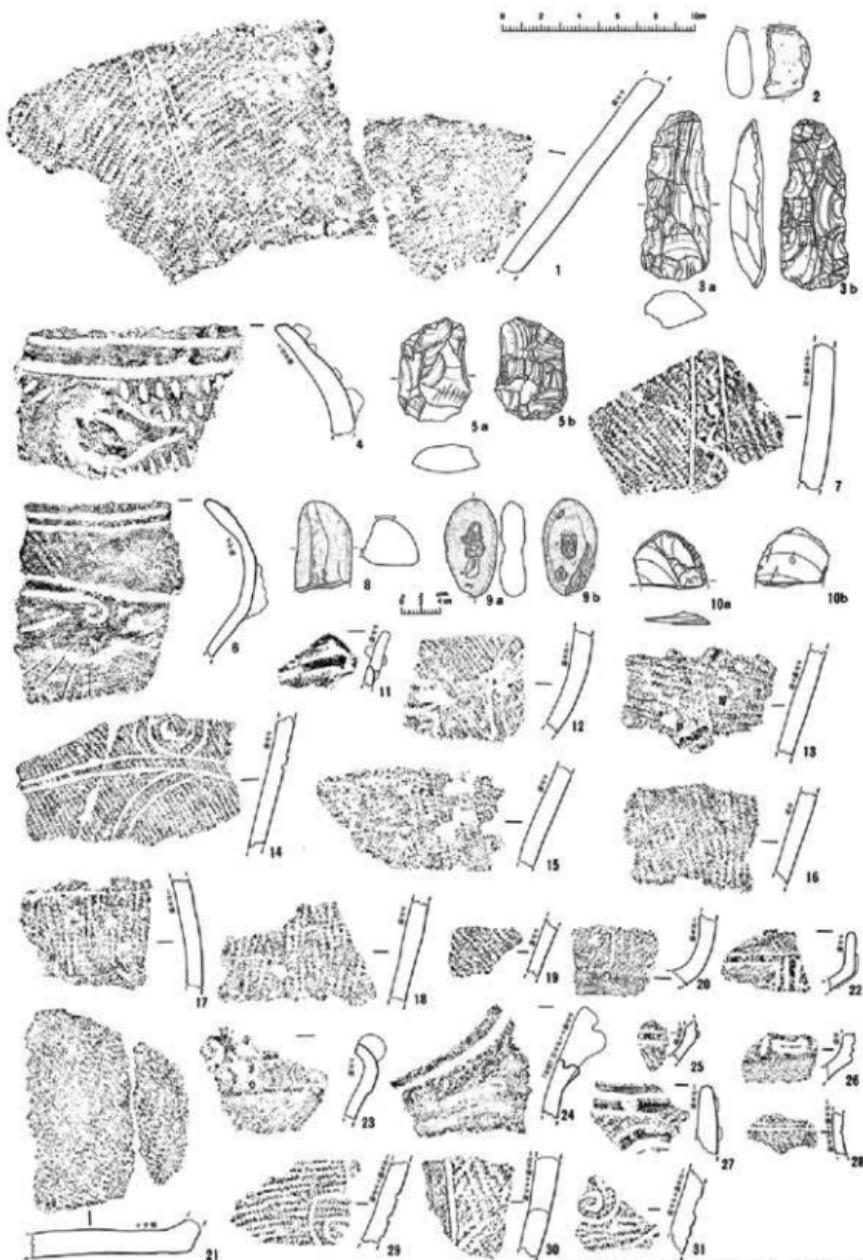
第22圖 法將寺遺跡遺構內出土遺物(5)

DY 1 出土 1—4 DY 2 出土 5—6 DY 3 出土 7—13
DY 4 出土 14—20 DY 5 出土 21—26



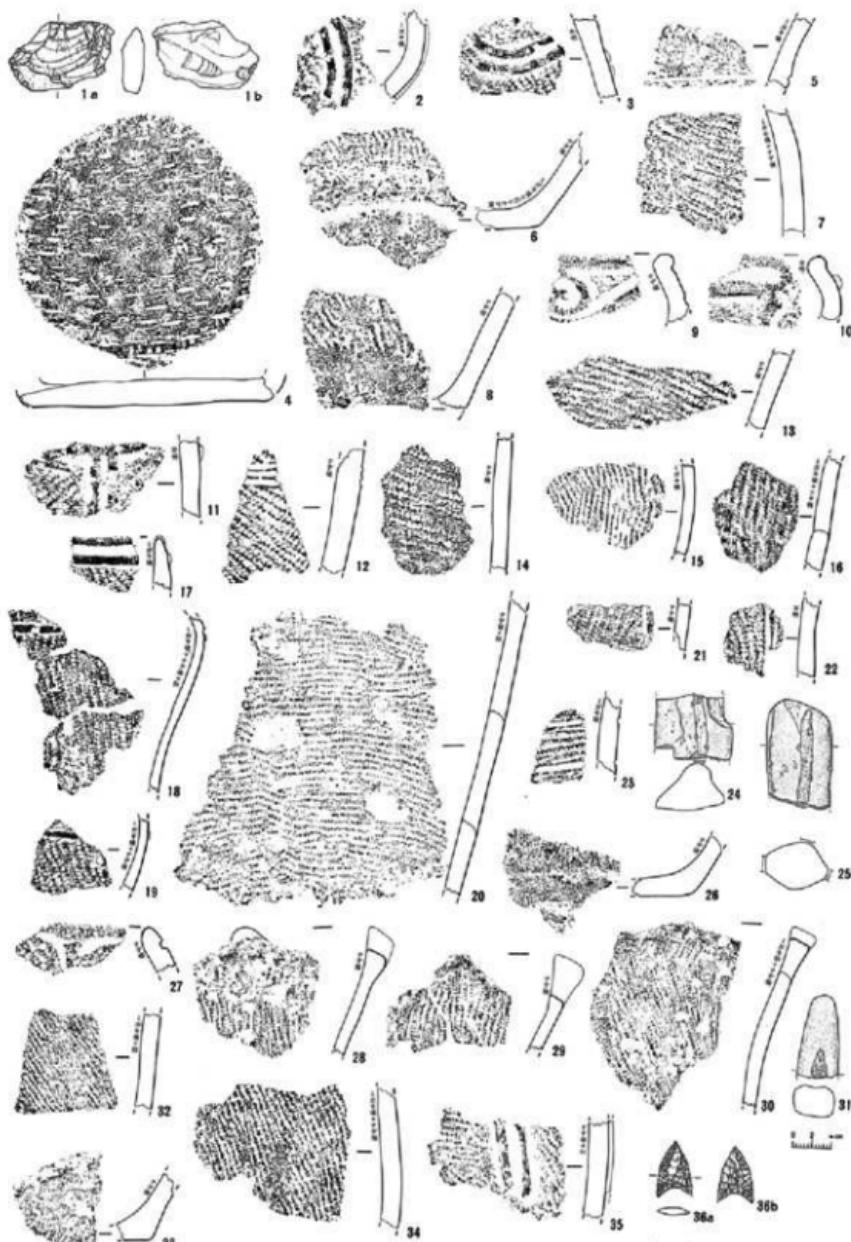
第23図 法将寺遺跡遺構内出土遺物(6)

DY10出土 1-8 DY11出土 9 DY13出土 11-15



第24图 法将寺造跡造構内出土遺物(7)

DY18出土 1~6 DY15出土 7~8 DY16出土 9
DY17出土 10~21 DY19出土 22~31



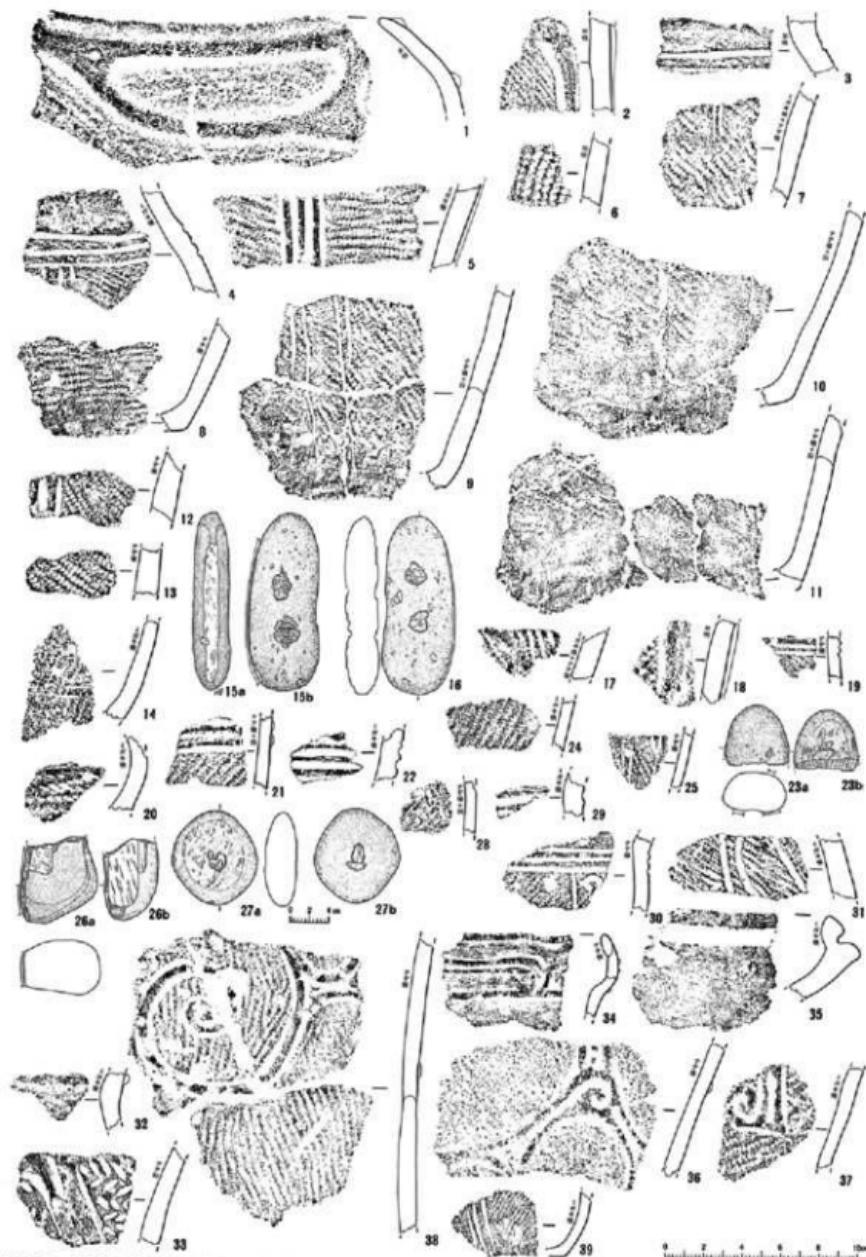
第25圖 法將寺遺跡構內出土遺物(8)

DY23出土 1
DY25出土 7 - 8
DY26出土 16 - 20
DY32出土 27 - 31
DY35出土 35
DY24出土 2 - 4
DY25出土 9 - 13
DY30出土 21
DY33出土 32 - 33
DY36出土 5 - 6
DY22出土 14 - 15
DY31出土 22 - 26
DY34出土 34
DY36出土 36



第26図 法将寺遺跡構内出土遺物(9)

DY36出土 1~4 DY37出土 5~12
 DY40出土 13~21 DY41出土 22~25
 PY46出土 26~27 PY47出土 28~31
 DY48出土 32~36 DY57出土 37~40
 MY81出土 41~44 DY58出土 41~44
 DY59出土 45~57 DY59出土 45~57
 DY63出土 58~63



第27図 法将寺遺跡構内出土遺物⑩

DY64出土 1 - 11 PY66出土 12 - 14 PY68出土 15 - 18
 DY76出土 19 - 23 PY77出土 24 - 27 DY89出土 28 - 30
 PY82出土 29 DY86出土 30 DY89出土 31
 DY105出土 32 - 39

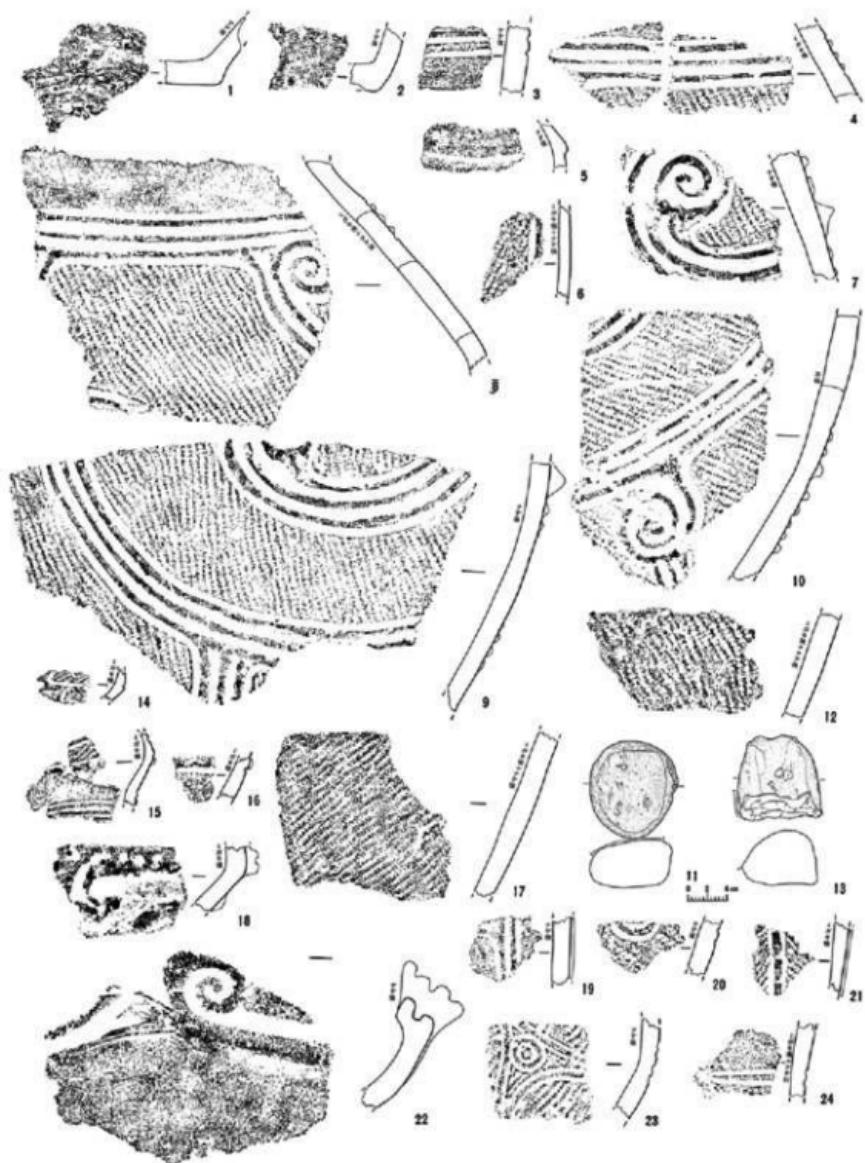


图28 法将寺遗址遗构内出土遗物(1)

PY106出土 1-2
 PY107出土 3 DY6 DY12出土 4-11
 PY113出土 12 DY125出土 13 KY127 14-16
 DY112出土 17 HY80出土 19-24

調整による沈線文と同様に調整貼付文を地文となる $L \{^R_R$ ・ $R \{^L_L$ ・ $L \{^R_R$ ・ $L \{^L_L$ ・ $R \{^R_R$ ・ $R \{^L_L$ を施した後に「の」字状溝巻文(第23図10~14他)、両端溝巻文(第23図15、第20図1他)、円状内溝巻文(第19図1)、嘴状内溝巻文(第27図38・36・37他)、「ハ」字状文(第22図25他)、懸垂文、平行、斜行文等で構成するグループである。先のC群I類は無調整を示すのに対し、本類は調整を主体とし、貼付文は発展して隆線を呈するのも含まれている。大木8b式に併行するグループを一括した。

C群III類 [第19図2、第20図2、第21図1・2]

文様の飾られない、粗整土器をまとめた。第18図2は二条の隆線を口唇部から口縁部にかけて横歩させ、4ヶ所にブリッチを配して胴部を縦位の $R \{^L_L$ で施している。器形は口縁部が胴部から内反する變形土器である。第19図2は口縁部が破損しているので不明であるが、胴部がゆるやかにふくらむ深鉢形土器とみられる。胴部を横位から斜位にかけて、下胴部から底部にかけて縦の $L \{^R_R$ 3本多条織文で構成している。第20図1は胴部最大径を上半部に置く變形土器であり、口縁部に二各の隆線を配し、先の第18図2に類する特徴がある。胴部は無文でヘラ調整を丹念に施している。

d 土偶 [第20図版1]

G30-4 第II層から土偶頭部1点が検出されている。長顎で頬がゆるやかに張り、眉から鼻にかけては粘土帶によって強調され奥まった目元は一見、外人風の感じをうける。米沢市からの土偶の発見はこれまでに南原山崎遺跡、南原大塙遺跡、広幡成島遺跡、吾妻町台ノ上遺跡(中期)、南原一本橋遺跡、八幡原No.30遺跡、八幡原No.31遺跡の7ヶ所があり、8ヶ所目の発見となった。しかし、頭部の検出は少なく、今回で4例となる。

e 自然遺物

D Y77のP Y79より炭化したドングリ18点が検出されている。炭化した自然遺物が検出されたのはD Y77が唯一であり、注目したい。



第29図 法将寺遺跡遺構内出土遺



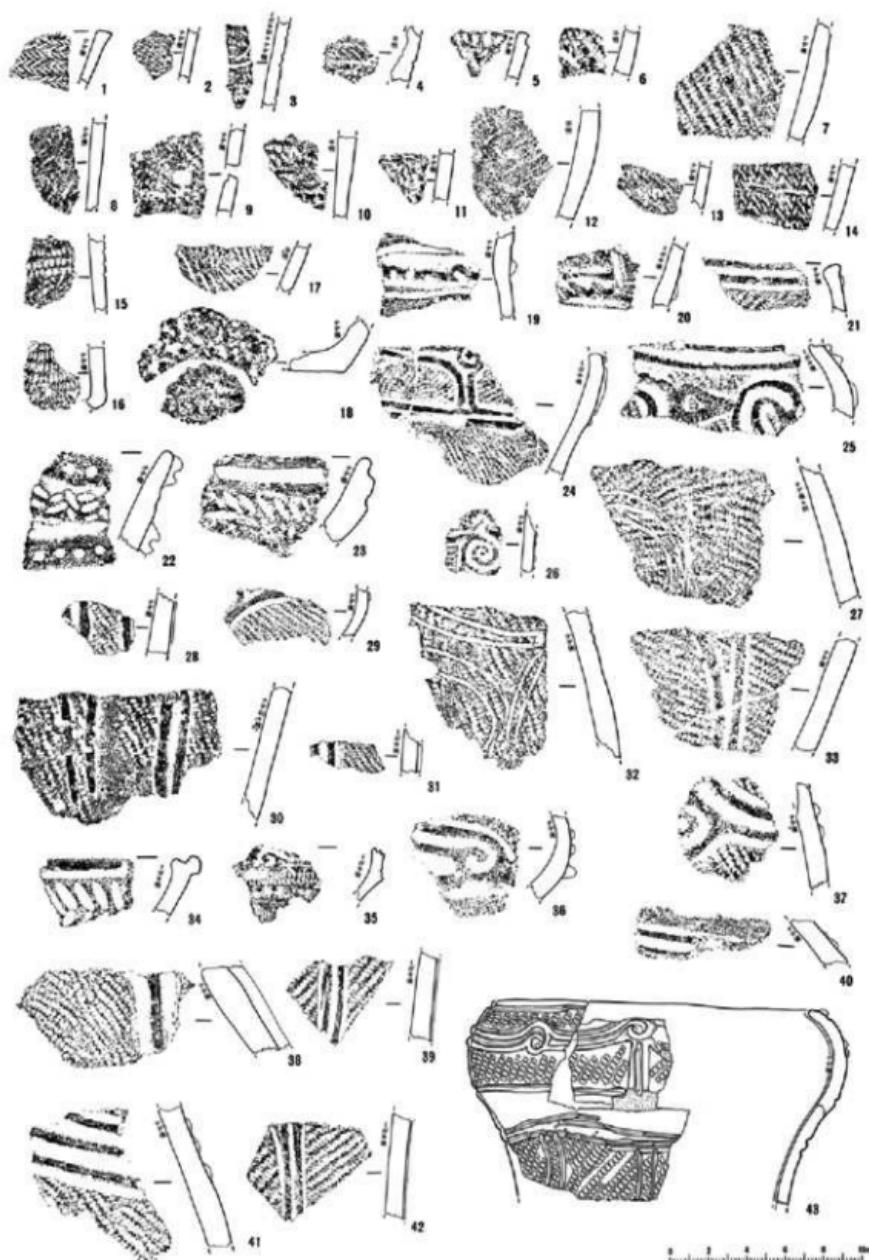
第30図 法将寺遺跡包含層出土遺物(1)

第IV層 1~82



第31図 法将寺遺跡包含層出土遺物(2)

第IV層 1-39



第32図 法将寺遺跡包含層出土遺物(3)

第三層1~18、第二層19~43

2) 石器〔第33図1～第35図6、第22図版1～27〕

出土した石器の中で、図面を必要と認識された石器36点、礫器44点について実測図を作成、さらに、第2表に石器形態分類表、第3表に石器計測表、礫器については第4表に礫器計測表を作成したので、詳細についてはこれらの表を参照願いたい。なを、石器、礫の分類に関しては次の報告書に記載している。(米沢市埋蔵文化財報告書第6集33頁、同8集24頁～36頁、同11集24頁)

形態別に出土した石器を列挙すると、I群石器(石鋸)5点、II群石器(尖頭器)3点、III群石器(石錐)5点、IV群石器(石匙)6点、V群石器(打製石斧)1点、VI群石器(石鎧)1点、VII群石器(石槍)3点、VIII群石器(スクレーパー類)8点、IX群石器(欠損品を有する石器)2点、X群石器(石核)1点、難群石器(石製品)1点となる。剥片類では、HY50の覆土及び床面上部よりチップ片(2mm～3mm)が221点と他に96点が検出されている。

礫はC(凹石)11点、D(磨石)29点、E(石皿)3点、F(敲石)1点がある。以下各群石器についての説明に入るが、紙面の都合上簡単に述べたい。

a¹群石器〔第33図1～5、第22図版7～20、26〕

3形態に細別され、e¹類のグループが3点、c²、d¹類が各1点認められる。DY30出土の第32図1を除き、縄文前期初頭の所産と言えよう。基部や先端部に欠損面を有す石器が3点ある。

b II群石器〔第33図6～8、第22図版24・25〕

第33図6は各年代に渡って不变的に認められる形態であり、I群石器の未完成品や製作途上あるいは製作断念石器で有り、基部が厚く、縁辺の調整も粗雑である。7も同様に年代幅をもって認められる。調整は6が両面調整を基本とし、7は片面調整品が多い。8は縄文早期中葉から前期初頭の範囲に位置する石器であり、八幡原遺跡群No.4、5遺跡第V層出土のII群石器a¹類に類似する形態を呈す。

c III群石器〔第33図9～13、第22図版12～16〕

つまみ部の形成が明瞭でないタイプの石器で占められる。a¹、a²類に細類された石器群13を除き小形であり、二等辺三角形状を有す。剥離調整面は錐部に集中しており、剥片素材の形態を残す。錐部の断面形態は三角形状をなすものが大半である。

d IV群石器〔第33図14～18、第34図1、第22図版6～10、21〕

片面調整によって整形され、横形(b²類)、縦形(c¹・c²・e¹・f¹類)に大別できる。15は縄文前期初頭の所産であり、早期の横形石匙とは異形である。なお早期の横形石匙は尖状を有し両面調整によって整形された特徴を持つ。18も早期中葉から同未葉に限定される石器である。17は米沢市三沢地区の松原遺跡出土の石匙に類似するものであり、縄文前期初頭と言える。33図1はDY11の出土であり、縄文前期に考えたい。

e V群石器〔第34図2、第22図版6〕

第2表 法将寺遺跡出土石器形態分類表

I群石器c'類～e'類, II群石器a'類～e'類

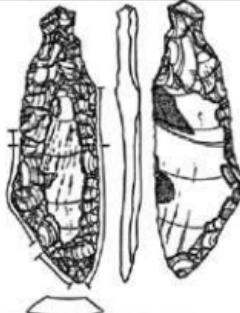
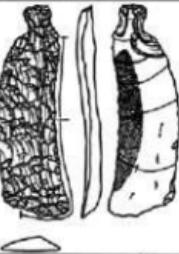
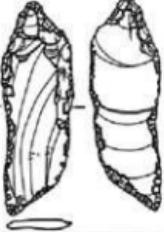
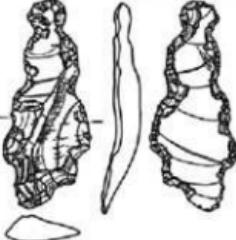
(長さ・幅・厚さcm)

III群石器a'類～b'類

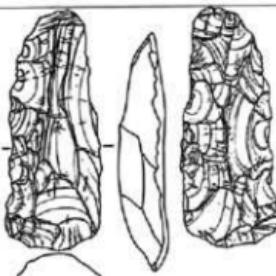
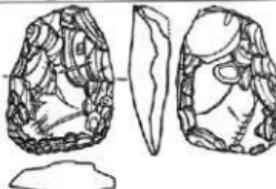
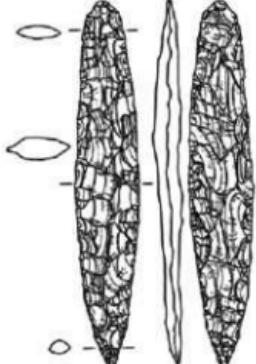
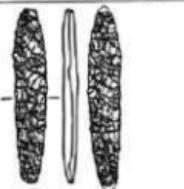
重さg

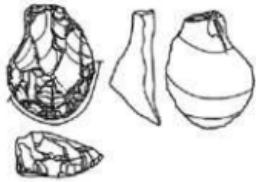
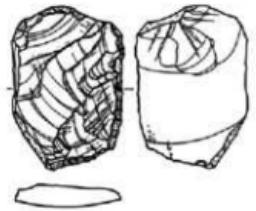
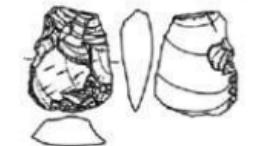
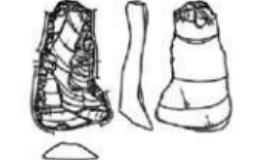
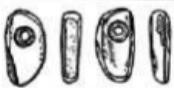
形 態		特 徴	計測平均	持団番号	II層	III層	IV層	遺構内出土
c'類		小形な形状を有し、基部が湾曲する。平坦な基部を有するe'類と区別した。	長さ 2.1 幅 (1.4) 厚さ 0.4 重さ 0.8	第33図2		1点		
I群 石器 d'類		本類は、典型的な二等辺三角形を有す。 基部の翼部は未発達であるのが特徴である。	長さ (2.9) 幅 1.6 厚さ 0.4 重さ 1.0	第33図3				H Y50-1点
e'類		基部が内湾し、翼部が外側に張り出す。 翼部は尖状を呈し、発達した後縁をもつ。	長さ 2.8 幅 1.5 厚さ 0.4 重さ 1.5	第33図1 第33図4 第33図5		2点		D Y36-1点
a'類		基部がゆるやかに外湾を有す。小形な類であり、尖状部は極端に薄い。	長さ 2.2 幅 1.4 厚さ 0.3 重さ 0.5	第33図7				D Y15-1点
II群 石器 c'類		中央部に最大幅を持つ。基部が平坦な類をc'類、基部が外湾するタイプをe'類に区別した。	長さ 4.1 幅 2.8 厚さ 0.5 重さ 5.0	第33図8			1点	
e'類		不定形な三角形状を呈す。剥離調整も簡単である。I群石器群に類似する。	長さ 2.2 幅 1.9 厚さ 0.4 重さ 2.0	第33図6			1点	
a'類		細身で小形な形状を有す。平坦な基部は、無調整であり剥離は尖状部に集中する。	長さ 3.2 幅 3.3 厚さ 0.5 重さ 2.5	第33図9 第33図10 第33図12		1点	1点	D Y56-1点
III群 石器 e'類		尖状部(鈎部)とつまみ部になる面を有するものをe'類とした。e'類よりも大形な形状をもつ。ただしつまみ部は未発達。	長さ 4.1 幅 2.5 厚さ 0.6 重さ 5.0	第33図13	1点			
g'類		両端に尖状部を有する形状を本類とした。 中央部が最も厚く、また最も幅もある。 両面調整が基本だ。	長さ 2.8 幅 0.9 厚さ 0.6 重さ 1.0	第33図11				D Y10-1点

〔IV群石器b²類～f¹類〕

	形 態	特 徴	計測平均	持回番号	口層	田層	IV層	遺構内出土
b ² 類		横形の形状を有す 尖状部をもつて類と 区別した。 調整はつまみ部を 除き片面調整である。	長さ 3.7 幅 5.0 厚さ 0.7 重さ 10.0	第33図15 第33図16				H Y51-1点
c ¹ 類		ナイ形を有し中央 部に最大幅を持つ。 先端部に対して延 びる縁辺は、片方は 直線的に、もう一方 はゆるやかなカーブ をえがきながら走り 先端部近くで、両縁 辺は互にゆるやかに 外湾しながら先端部 達す。	長さ 10.2 幅 3.3 厚さ 0.9 重さ 28.0	第33図14 第33図16		1点		D Y46-1点
IV 群		本類は、尖状部を もたないことからd 類と区別した。 剥離調整は、b面 に集中し、Ibの縁辺 からの調整が且b面近 まで達している。 このため、棱線は 極端に右にある。	長さ 7.8 幅 2.4 厚さ 0.7 重さ 15.0	第33図17				H Y50-1点
e ¹ 類		薄形剥片を素材と して用い様より簡単 な調整を加えて整形 している。 つまみ部の整形が 明瞭でなく、先端部 が尖状を有す。尖状 部は外側に張り出す。	長さ 7.9 幅 2.7 厚さ 0.3 重さ 10.0	第33図18		1点		
f ¹ 類		本群石器の中でも 特異な形状を有する ものである。 意図的に整形され た突起状を呈するの が特徴だ。 突起部は周囲調整 によって整形されて いる。	長さ 7.8 幅 3.2 厚さ 0.9 重さ 17.0	第34図1				D Y11-1点

〔V群a¹類, VI群j¹類, VII群a¹類～d¹類〕

	形 態	特 徴	計測平均	種図番号	II層	III層	IV層	遺構内出土
V 群 b ¹ 類		基部がやや尖状を有す。刃部はゆるやかな丸味を帯び、基部と刃部は結ぶ縁辺は平行に走る。 洞窓調整は、両面調整によって整形され、刃部を最後に調整している。中央部から刃部が最も厚い。	長さ 8.9 幅 3.7 厚さ 1.9 重さ 49.0 刃角 57°	第34図2				D Y13-1点
IV 群 j ² 類		j ¹ 類は、長方形を呈するグループである。 j ² 類のタイプは両端が丸味を持つ。また刃部近くに最大幅がある。両面調整で整形されている。	長さ 5.5 幅 3.9 厚さ 1.3 重さ 26.0 刃角 56°	第34図3	1点			
VII 群 a ¹ 類		槍形を有し、両端に尖状部を持つ。 この石器に関しては次の特徴がある。 両端の断面形状を見てわかる様に片方が丸味を帯び、もう一方は凸レンズ状に整形されている。 これは、柄着役やナイフの機能を有利にすることを意識して製作されている。	長さ 7.9 幅 2.7 厚さ 0.3 重さ 10.0	第34図7			1点	
VII 群 a ² 類		両端が尖状を有ることではa ¹ 類と類似する。 a ² 類は、両端を結ぶ縁辺が平行に延びていてこととa ¹ 類と相異し、細類した。	長さ (6.4) 幅 1.2 厚さ 0.9 重さ 4.0	第34図9				H Y50-1点
d ¹ 類		Ⅶ群石器で欠損面を持つグループを本類とした。	長さ (3.2) 幅 2.3 厚さ 0.9 重さ 8.0	第34図9		1点		

	形 態	特 徴	計測平均	標因番号	I 層	II 層	IV 層	遺構内出土
b ² 類		横円形を基本とするグループである。 b ² 類は、中央部に較大幅があるタイプ。 b ² 類は刃部近くに較大幅があり、さらにこの面が内厚である。	長さ 6.1 幅 4.6 厚さ 2.3 重さ 52.0	第35図 3	1点			
g ¹ 類		正方形を有するグループをg ¹ 類、長方形の形状をもつものをg ² 類とした。 使用線辺となる箇所は、線辺のコーナ部が多い。 片面調整を主体としている。	長さ 6.1 幅 4.2 厚さ 0.8 重さ 29.0	第35図 5	1点			
j ¹ 類		剥片にR ¹⁻² の調整を加えたグループを本類とした。 素材に用いられる剥片は、薄形で縦形のものが多い。	長さ 5.5 幅 4.4 厚さ 0.5 重さ 5.0	第35図 2			1点	
k ¹ 類		平根な基部と外湾する刃部を持つ。 b ¹ 類は無調整でありバルブ除去を加えられていない。	長さ 5.5 幅 4.4 厚さ 1.6 重さ 37.0	第34図 4	1点			
g ¹ 類		縦形の剥片を素材としている。 突起部を有する線辺を持つのが特徴であり、片面調整だ。	長さ 9.7 幅 5.6 厚さ 1.2 重さ 81.0	第35図 1				D Y64-1点
IX 群 b ¹ 類		石核を本群とした自然面を有し、剥離面を整形することなく、線辺より剥離作業を加えている。	長さ 8.3 幅 5.8 厚さ 4.0 重さ 20.0	第35図 4				D Y7-1点
XI 群 a ² 類		小形の玉類を本群とした。 硬玉質で作られ白緑色である。	長さ 2.8 幅 1.5 厚さ 0.8 重さ 0.5	第35図 6				D Y62-1点

第3表 法将寺遺跡出土石器計測表

I群石器

(長さ・幅・厚さcm・重さg)

通し No	遺物No	拂団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
1		第33図2	4-29	III	2.1	(1.4)	0.4	0.8	頁岩	I群c'類	I-Wab+R4.5	基部欠損
2	BZ19	第33図3	HY50		(2.9)	1.6	0.4	1.0	頁岩	I群d'類	I-IIIab+R4.5	尖端部欠損
3		第33図1	DY36		2.9	(1.9)	0.4	1.0	頁岩	I群e'類	I-IIIab+R4.5	基部欠損
4	BZ28	第33図4	3-28	III	(2.7)	1.4	0.4	2.0	頁岩	I群e'類	I-IIIab+R4.5	尖端部欠損
5	NO448	第33図5	3-27	III	2.8	1.4	0.5	2.0	頁岩	I群e'類	I-IIIab+R4.5	

II群石器

通し No	遺物No	拂団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
6		第33図7	DY15		2.5	1.4	0.3	0.5	頁岩	II群a'類	IIIb+R5.5	a面無調整
7		第33図8	3-29	IV	4.1	2.8	0.5	5.0	頁岩	II群c'類	I-IIIa+R5.5 I-IIWa+R7.8	
8		第33図も	6-35	III	2.2	1.9	0.4	2.0	頁岩	II群e'類	IIIab+R5.5 Ia+R5	

III群石器

通し No	遺物No	拂団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
9		第33図10	4-29	IV	3.1	1.2	0.5	3.0	頁岩	III群b'類	I-IIab+R4.5 IIb+R5	自然面有り
10	BZ7	第33図12	3-29	III	3.7	1.6	0.5	3.0	頁岩	III群b'類	I-IIab+R5.5	切断面有り
11	BZ16	第33図9	DY56		2.7	1.0	0.5	1.0	頁岩	III群a'類	IIb+R4~6	切断面有り
12	BZ3	第33図13	5-35	II	4.1	2.5	0.6	5.0	頁岩	III群a'類	I-IIa+b+R5~7	バルブ除去
13	BZ10	第33図11	DY10		2.8	0.9	0.6	1.0	頁岩	III群b'類	I-IIab+R4.5	切断面有り

IV群石器

通し No	遺物No	拂団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
14	BZ21	第33図15	HY51		3.7	5.0	0.7	10.0	頁岩	VI群b'類	I-IIIb+R3.5 IVa+R7~9	
15	BZ12	第33図14	DY46		10.2	3.3	0.9	28.0	頁岩	VI群c'類	I-IIIab+R7~9	
16	BZ8	第33図16	5-31	III	(2.2)	(1.4)	(0.4)	2.0	頁岩	VI群c'類	I-IIa+b+R5.5 VIb+R5	使用痕有り 欠損
17	BZ25	第33図17	HY50		7.8	2.4	2.4	15.0	頁岩	VI群c'類	I-IIIab+R4~6 I-IIa+R7~9	使用痕有り 縫合片使用
18	BZ29	第33図18	3-29	IV	7.9	2.7	2.7	10.0	頁岩	VI群b'類	I-IIIab+R4~5 I-IIb+R8.5	縫合片使用
19	BZ9	第34図1	DY11		7.8	3.2	3.2	17.0	頁岩	VI群b'類	I-IIa+R4~6 I-IIIb+R7~9	

V群石器

通し No	遺物No	拂団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
20	BZ11	第34図2	DY13		8.9	3.7	1.9	49.0	頁岩	V群b'類	I-IIIabIVa+R7~9	

VI群石器

通し No	遺物No	拂団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
21	BZ30	第34図3	5-20	II	5.5	3.9	1.3	26.0	頁岩	VI群c'類	I-IIab+R7~8 IIIb+R7.8	ハジケ面有り

VII群石器

通し No	遺物No	拂団番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形態	剥離調整	備考
22	BZ27	第34図7	3-29	IV	7.9	2.7	0.9	10.0	頁岩	VI群a'類	I-IIab+R1~3 R4~6	
23	BZ15	第34図9	HY50		(6.4)	1.2	0.9	(4.0)	頁岩	VI群a'類	VIab+R4~5	両尖端欠損

VII群石器

通し No	遺物No	神田番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形 態	剝離調整	備 考
24	810	第34回8	9-22	III	(3.2)	2.3	0.9	0.8	頁岩	VII群d'類	I-IIab+R ^{5.5}	両端部欠損

VIII群石器

通し No	遺物No	神田番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形 態	剝離調整	備 考
25		第35回3	5-29	II	6.1	4.6	2.3	52.0	頁岩	VII群b'類	IIIb+R ⁷⁻⁹ I-IIb+R ⁹	
26		第35回5	4-22	II	6.1	4.2	0.8	29.0	頁岩	VII群g'類	II~IIIb+R ⁷⁻⁹	
27		第35回2	5-32	IV	4.5	2.6	0.5	5.0	頁岩	VII群j'類	IIb+R ¹	
28	B Z 6	第34回4	5-29	II	5.5	4.4	1.6	37.0	頁岩	VII群k'類	I~IIIb+R ⁷⁻⁹ IIa+R ^{8.5}	
29	B Z 20	第35回1	D Y 64		9.7	5.6	1.2	81.0	頁岩	VII群e'類	I~IIIb+R ⁷⁻⁹	使用痕有り

X群石器

通し No	遺物No	神田番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形 態	剝離調整	備 考
30	B Z 2	第34回5	5-29	II	(3.0)	2.6	0.7	8.0	頁岩	X群a'類	I~IIIab+R ⁷⁻⁹	欠損面有り
31		第34回6	D Y 3		(3.3)	2.9	1.4	16.0	頁岩	X群a'類	I~IIIab+R ⁷⁻⁹	欠損面有り

XI群石器

通し No	遺物No	神田番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形 態	剝離調整	備 考
32		第35回4	D Y 7		8.3	5.8	4.0	200	頁岩	VII群b'類	R ⁸	化石面有り

XII群石器

通し No	遺物No	神田番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	形 態	剝離調整	備 考
33	B Z 17	第35回6	D Y 62		2.8	1.5	0.8	0.5	玉髓	XII群a'類	研磨による擦切痕有り	穴外0.8、内0.3

第4表 法将寺遺跡出土標計測表 (長径、短径、厚さmm、重さg)

通しNo	遺物No	神田番号	出土地区	層位	形態	腹面	細 分	長径	短径	厚さ	重さ	石材	備 考
1		第23回9	D Y 16		C	H A	I B+C ⁸	(10.0)	5.6	2.8	630	石英粗面岩	欠損面有り
2		第18回6	H Y 49		C	H A	I A+C ²	11.2	7.5	4.7	1,320	石英粗面岩	
3		第26回16	P Y 69		C	H D	I B+C ¹ +D' 1	19.0	7.3	4.0	730	安山岩	
4		第26回23	D Y 76		C	H A	I B+C ¹ +D' 2	(6.3)	(6.8)	4.1	260	安山岩	欠損面有り
5		第26回27	D Y 77		C	H A	I A+C ¹ +D' 1	(10.0)	9.1	3.4	370	安山岩	欠損面有り
6		第24回31	D Y 32		C	H A	I B+C ¹	(8.5)	4.4	3.2	170	安山岩	欠損面有り
7		第25回9	D Y 37		C	H D	I A+C ¹¹	14.2	9.2	4.0	1,530	安山岩	
8		第25回55	D Y 64		C	H A	I A+C ¹¹	15.2	6.9	4.4	610	石英粗面岩	
9		第25回53	D Y 63		C	H A	I A+C ¹ +D' 1	10.3	9.1	6.5	650	安山岩	
10	214	第36回1	3-27	II	C	H C	I A+C ⁸	9.3	8.6	3.2	330	安山岩	
11		第36回2	3-29	II	C	H C	I C+C ¹³ +D' 1	17.7	8.2	6.5	1,000	安山岩	
12		第23回8	D Y 15		D	H C	I B+D' 2	(9.5)	6.1	4.9	430	花崗閃綠岩	欠損面有り
13		第23回2	D Y 13		D	H A	I A+D' 1	(5.0)	7.2	2.7	150	安山岩	欠損面有り
14		第21回5	D Y 2		D	H B	I B+D' 1	18.3	5.8	5.7	920	石英粗面岩	
15		第21回6	D Y 2		D	H C	I B+D' 2	17.7	8.2	6.5	1,000	石英粗面岩	
16		第17回12	H Y 50		D	H A	I C+D' 2	15.4	7.9	8.3	1,540	安山岩	
17		第17回16	H Y 50		D	H C	I B+D' 1	30.5	11.1	13.0	3,750	安山岩	

通し番号	計測番号	採取番号	出土地名	層位	形態	縦面	細分	長径	短径	厚さ	重さ	石材	備考
18		第17図17	H Y50	D	II A	I B + D' 1		15.5	8.9	8.6	1,420	石英粗面岩	
19		第17図18	H Y50	D	II A	I B + D' 2		12.9	8.1	3.8	470	安山岩	
20		第17図46	H Y52	D	II C	I B + D' 1		16.2	6.1	5.8	1,310	石英粗面岩	
21		第17図47	H Y52	D	II C	I B + D' 1		13.8	4.9	6.2	510	安山岩	
22		第27図11	D Y12	D	II D	I A + D' 1		10.3	9.2	5.2	750	安山岩	
23		第27図13	D Y125	D	II A	I A + D' 1	(9.2)	8.9	5.7	540	安山岩	欠損面有り	
24		第26図26	D Y77	D	II A	I A + D' 1	(9.2)	8.0	5.6	580	安山岩	欠損面有り	
25		第24図24	D Y31	D	II C	I B + D' 2	(6.8)	8.2	5.1	300	安山岩	欠損面有り	
26		第24図25	D Y31	D	II A	I B + D' 3	(10.3)	9.2	5.2	750	安山岩	欠損面有り	
27		第25図10	D Y37	D	II A	I A + D' 1	(7.5)	6.6	6.2	370	安山岩	欠損面有り	
28		第25図43	D Y58	D	II D	I B + D' 1	(7.3)	5.4	4.9	240	安山岩	欠損面有り	
29		第25図54	D Y64	D	II D	I B + D' 1	(14.0)	8.0	3.6	590	安山岩	欠損面有り	
30		第36図3	2 - 35	III	D	II D	I B + D' 1	(9.4)	7.1	4.6	470	安山岩	欠損面有り
31		第36図4	6 - 29	III	D	II C	I B + D' 1	(9.6)	5.3	5.0	350	安山岩	欠損面有り
32		第36図5	5 - 32	III	D	II C	I B + D' 1	17.4	7.8	6.1	980	安山岩	
33		第36図6	3 - 30	IV	D	II C	I B + D' 1	(10.2)	7.0	7.1	620	安山岩	欠損面有り
34		第36図7	4 - 31	IV	D	II C	I C + D' 1	(11.2)	6.3	5.5	360	安山岩	欠損面有り
35		第36図8	5 - 29	II	D	II C	I C + D' 1	13.4	9.0	7.1	510	安山岩	欠損面有り
36		第36図9	3 - 29	IV	D	II C	I B + D' 1	(10.3)	8.5	7.8	750	安山岩	欠損面有り
37		第36図10	4 - 30	II	D	II C	I B + D' 1	(7.7)	5.6	5.5	280	安山岩	欠損面有り
38		第36図11	3 - 25	II	D	II D	I A + D' 2	9.2	9.2	3.2	270	安山岩	
39	529	第36図12	5 - 38	II	D	II D	I B + D' 1	9.7	4.4	1.8	1,100	安山岩	欠損面有り
40		第36図13	4 - 30	II	D	II B	I B + D' 1	(7.7)	5.6	5.5	280	安山岩	
41		第21図13	D Y 3	E	II D	I A + 2 E	52	37	9.5	5,200	石英粗面岩		
42		第36図14	4 - 30	II	E	II D	I B + 2 E	39.6	26.9	8.8	3,500	石英粗面岩	
43		第36図15	5 - 32	II	E	II D	I B + 2 E	32.2	26.6	9.0	3,100	石英粗面岩	
44		第21図12	D Y 3	F	II D	I B		38.4	10.6	9.5	2,100	花崗閃綠岩	3面に敲痕を有す

剝離調整や、刃部形態の観察により、V群石器とした。刃部の再調整は加えられておらず、完成時の形態を有すものと考えたい。基部が若干ねじれた形状を呈す。

f VI群石器〔第34図3、第22図版2〕

このタイプの石器は、縄文早期中葉から多く認められ、各時代に渡って存在する。

g VII群石器〔第34図7～9、第22図11、22〕

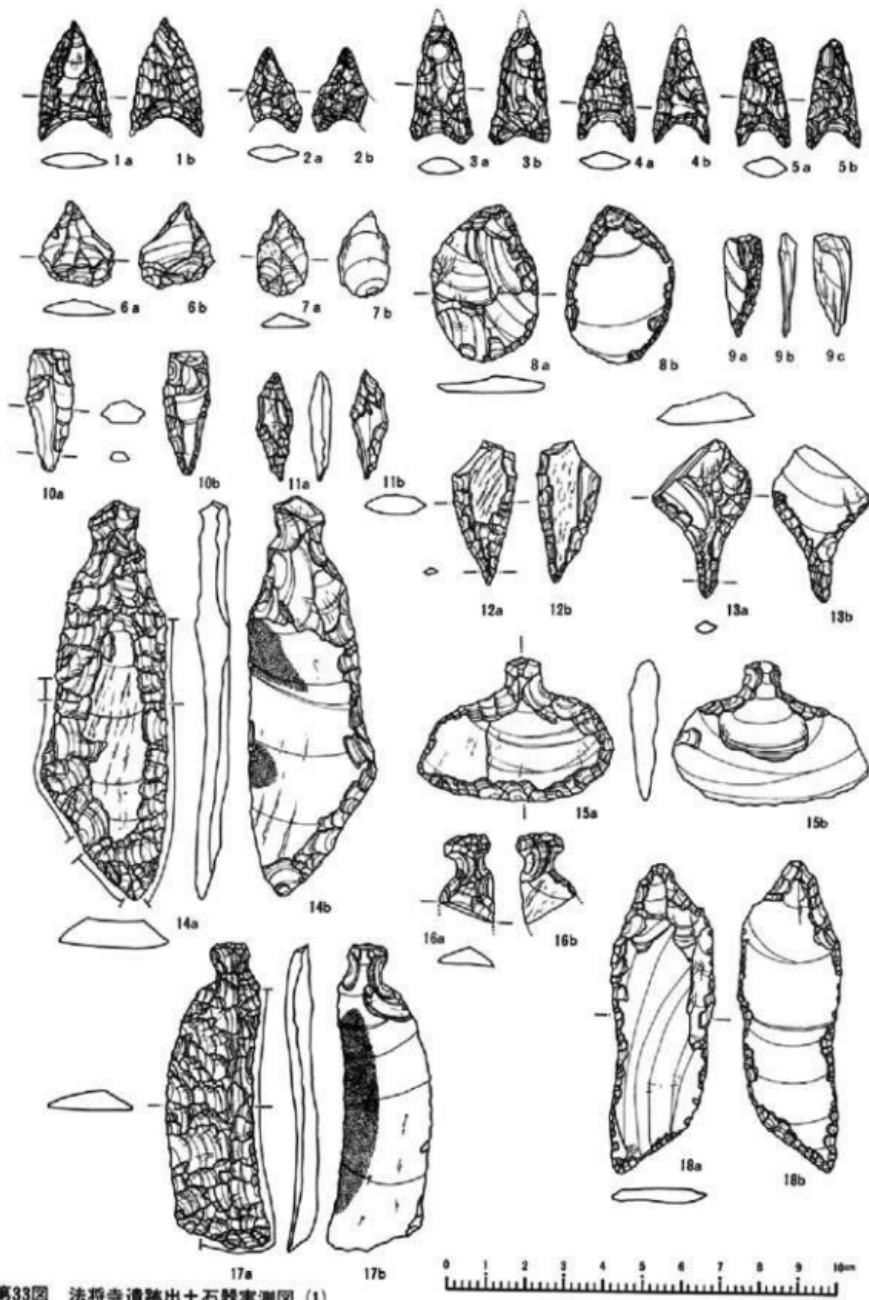
7は早期末葉の所産であり、これを下だらない形態と言えよう。9は前期初頭であり7との相異が感じられる形態を有す。8は、両端が欠損していることから全容は不明といわざるをえない。

h VIII群石器〔第34図4、第35図1～3・5、第23図5・10、第24図1、第25図16、第22図版1・3～5〕

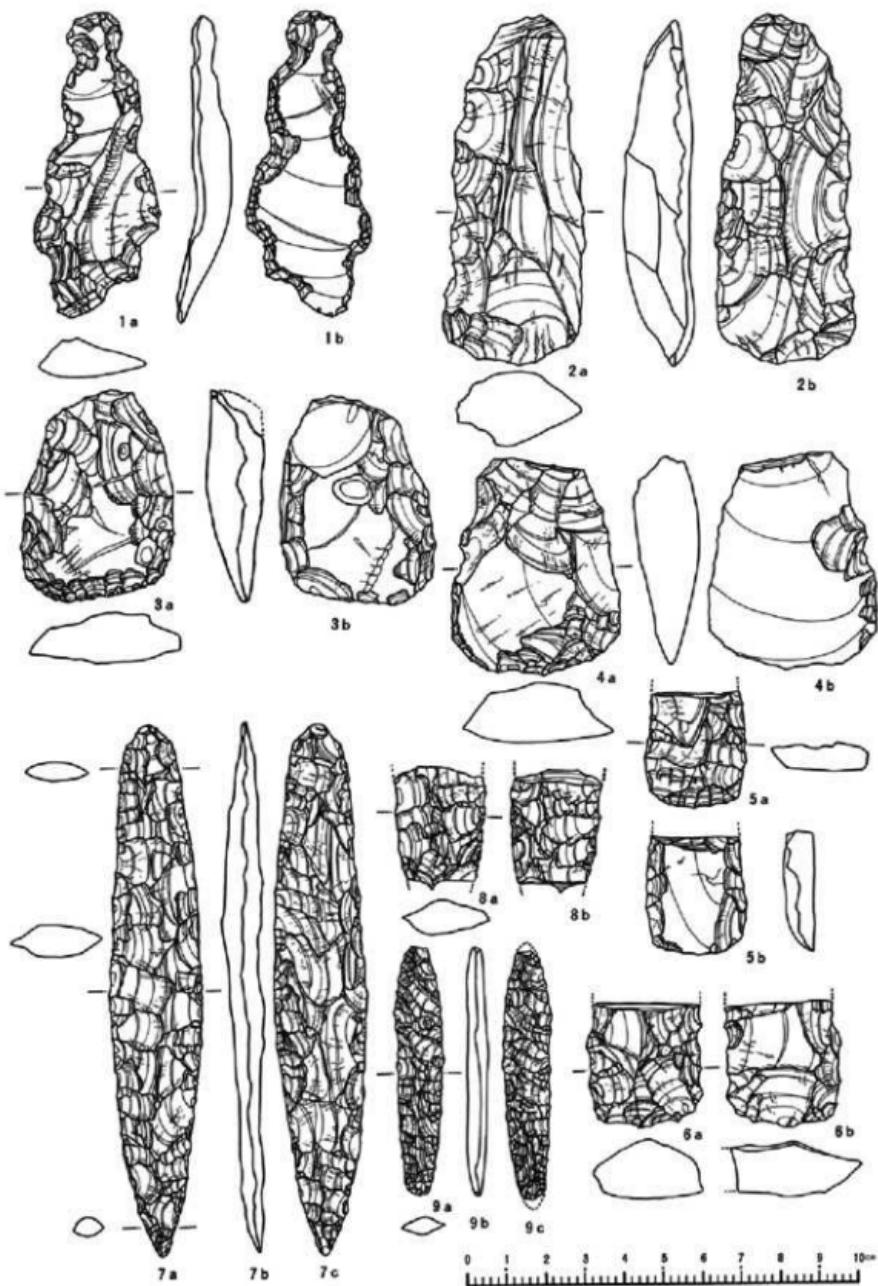
本群は、不定形を有すことから、12形態に細別している。本遺跡からは、5形態が出土した。

i IX群石器〔第35図6、第22図版28〕

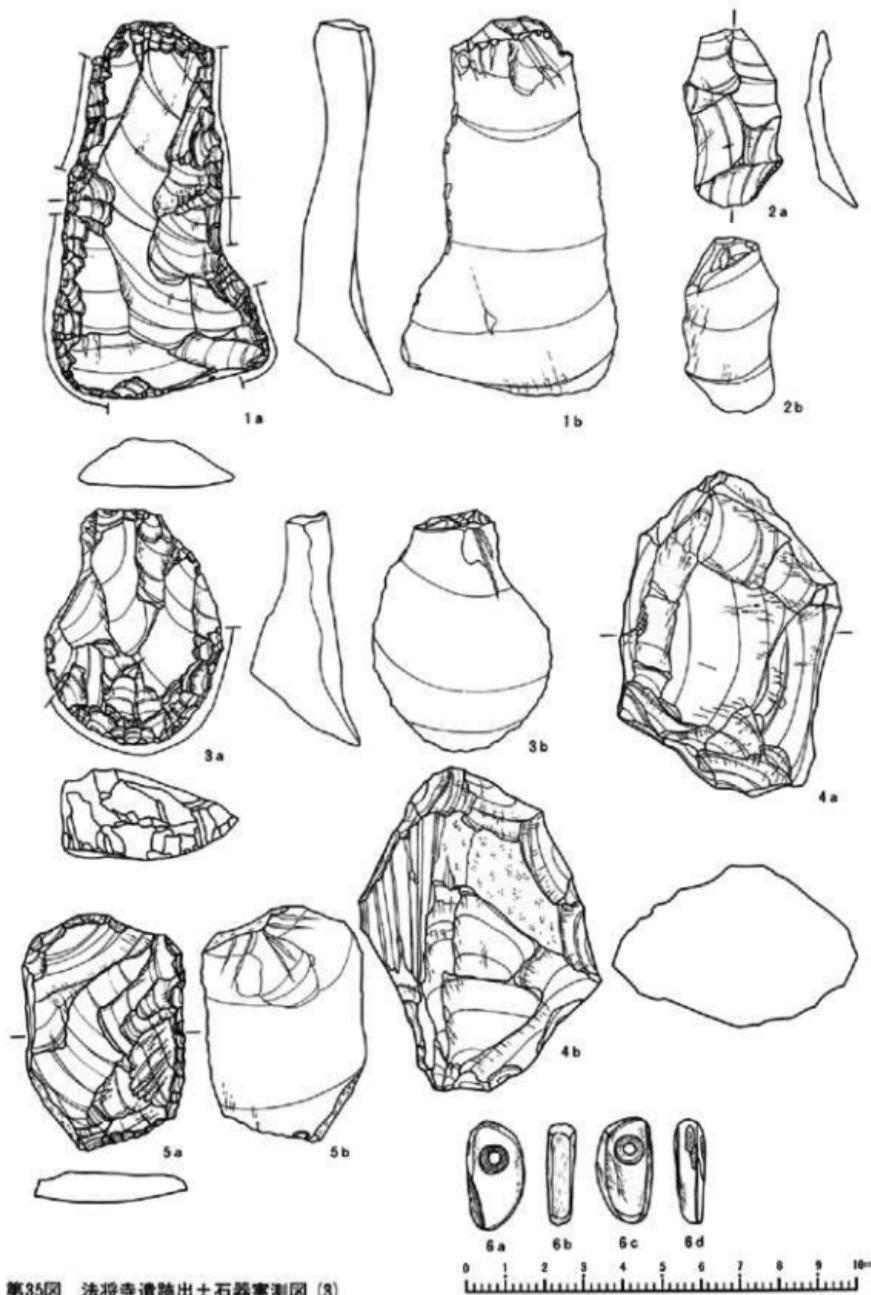
今回調査区の唯一の磨製品であり、D Y62から出土した。硬質な石材を使用し、全面を研磨によって仕上げている。上端には外径0.8cm、内径0.3cmの穴を有孔した。装飾品(ペンダント)である。



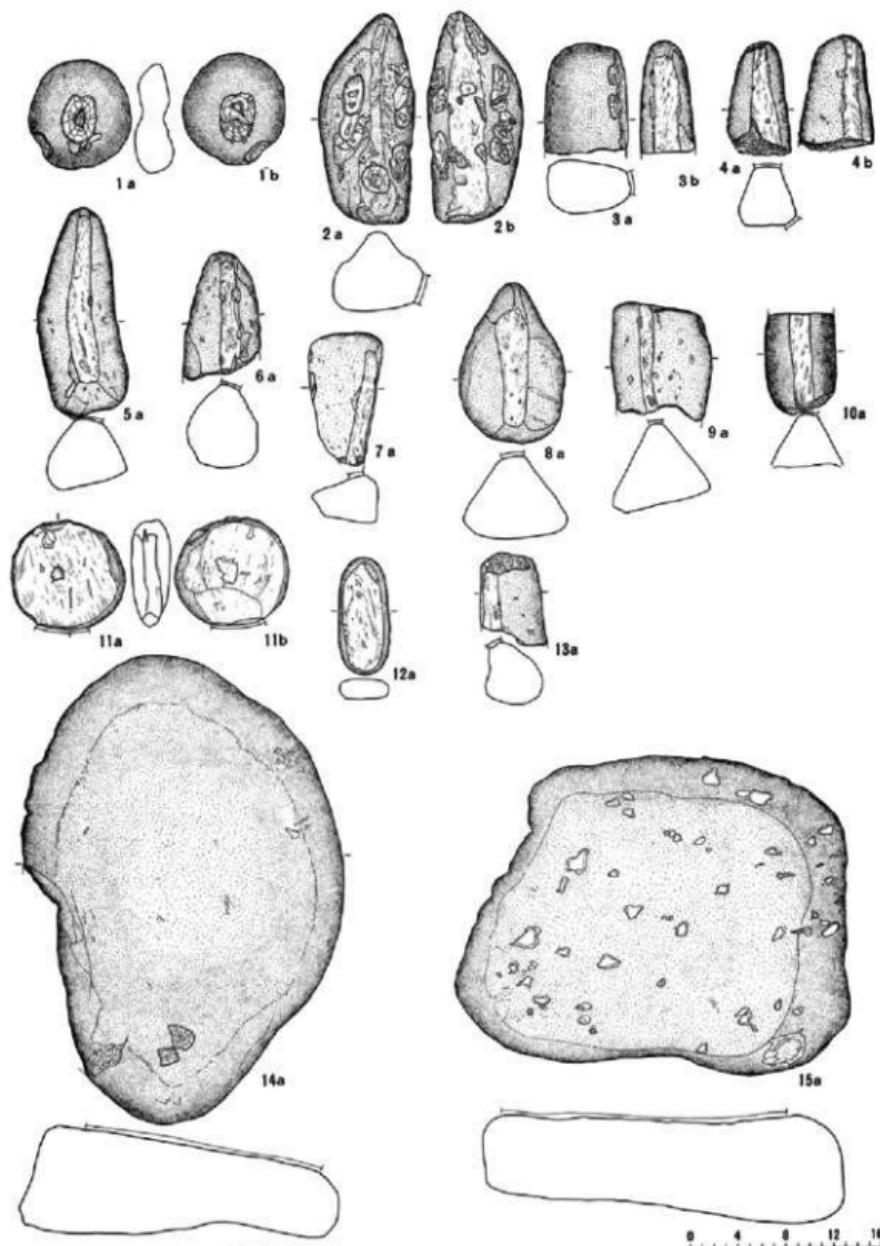
第33図 法将寺遺跡出土石器実測図(1)



第34図 法将寺遺跡出土石器実測図 (2)



第35図 法将寺遺跡出土石器実測図(3)



第36図 法将寺遺跡出土石器実測図(1)

5 まとめ

今回調査した法将寺遺跡は道路敷地内と云うこともあって、ごく限られた範囲の調査であったことから十分な資料を得ることが出来なかった。しかし、発掘した成果から本遺跡の保有する貴重な財産を確認したことは大きく、米沢市内における重要遺跡の一つとして位置付けられることであろう。さて、これまでに述べて来た成果を基に遺構、土器、石器に分けて要約し、まとめとする。

1. 遺構では縄文前期初頭の竪穴住居跡が注目される。山形県内では大石田町庚申町遺跡、長井市長者屋敷、同須刈田遺跡、米沢八幡原No.26遺跡、同松原、大塙遺跡に次ぐもので、3~4mの方形プランに近い形状を占めしていたのに対し、法将寺発見の竪穴住居跡は長方形プランを特徴としている。また関東地方に多くみられる住居跡は方形でかつ、周溝を配するものが主であり、法将寺を含む県内の前期初頭の住居跡は周溝を有するものは存在しなく、地方的特質を有するものとして注目されよう。また最近、南陽市教育委員会の手によって須刈田遺跡の発掘調査が実施され、長方形プランを有する石囲い炉を持つ縄文前期初頭の住居跡が発見されたと云う、筆者らの実見では住居跡とするには相当問題があると思われる。

2. 土器群としては縄文早期の土器類が注目される。分析の結果、縄文早期の中葉後半に位置付けられ、田戸上層、大寺、常世、子母口式に類例をみいだすことができる。しかも同一層内からの検出であり、若干の年代差はあるにしても、ほぼ近い時期の範疇で位置付けられる。

昭和55年に調査した桑山No.5遺跡からは日計式や、稻荷台式（同時期ではない。念のため）のⅠ期とした住居跡とともにⅧ期とした野鳥期までの18基の竪穴住居跡が検出された。この中でⅡ期に田戸下層と明神裏Ⅲ式を併行させⅥ期に田戸上層式を位置付けた。また大寺式もこの類に位置付けていたが、田戸上層と明神裏Ⅲ式との年代的な序列は不自然であった。今回の法将寺遺跡からは田戸上層、大寺、常世が併行して確認され、明神裏Ⅲ式が含まれていないことから明確に区別出来そうである。

3. 石器も時期別に応じて、特徴的に変化している。ことに石匙は早期の第Ⅳ層からはツマミ部を有さない両面加工のⅣ群e 1類が検出され、前期では明確にツマミ部を有していく。またHY51から横型の石匙1点が検出された。前期の横型石匙は福井県鳥浜貝塚の様に西日本に多い型態であるが横型特有の明瞭な両面調整調は行なわれず片面調整を主体とした東北地方の特徴をもつ。もう一つDY11から検出された使用痕をもつ鋸歯状石匙1点がある。覆土からの検出で混入したこととも考えられるが中期と考えたい。県内では同様な型態を示す発見が少なく貴重な資料である。

以上簡単に要点をまとめたが、種々な問題がある。この点は近い将来の2次調査の課題として残しておく。最後に発掘調査を実施するに当り色々な面でお世話になった地元の方々、米沢市農林課、山形大学学生諸君に対し心から感謝の意を表したい。

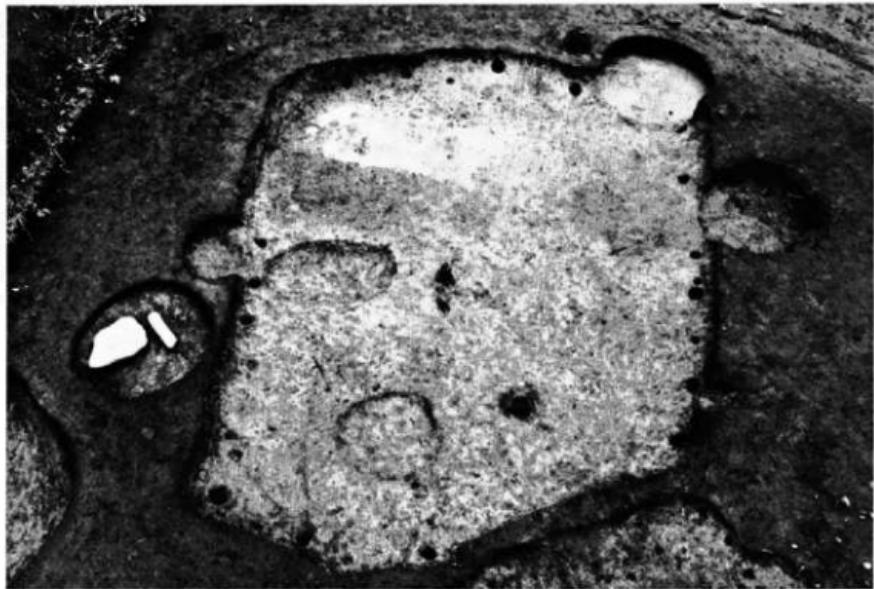
図 版



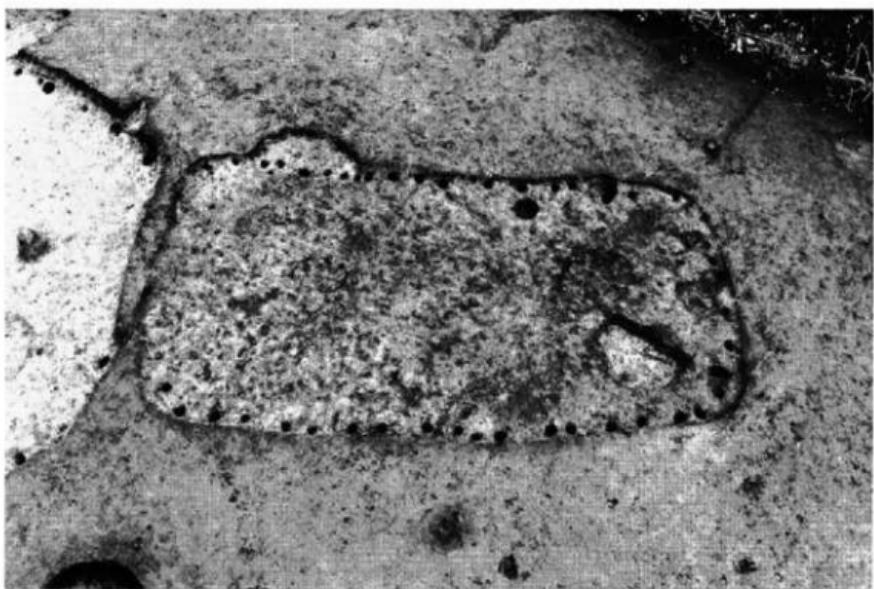
▲第Ⅳ層面遺構全景



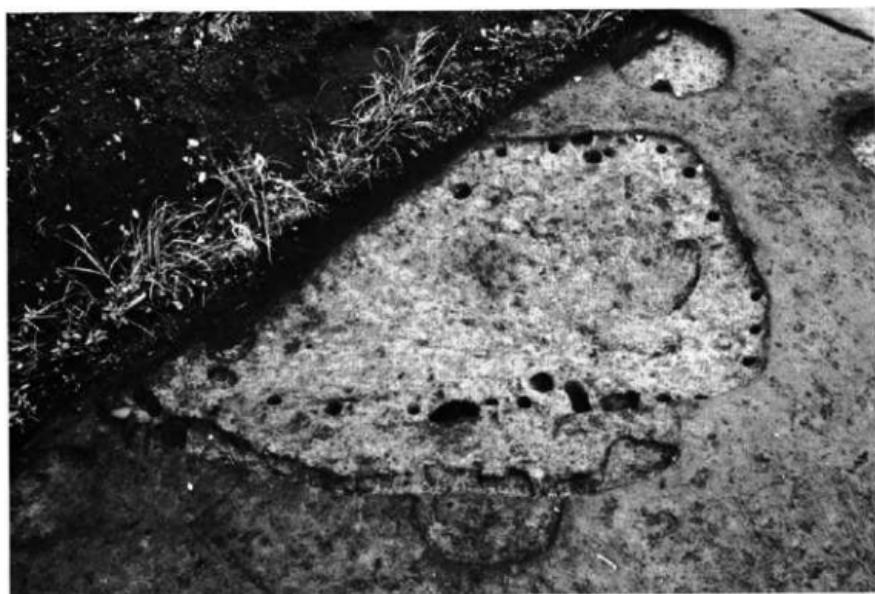
▲第Ⅱ層面遺構全景



▲HY51全景



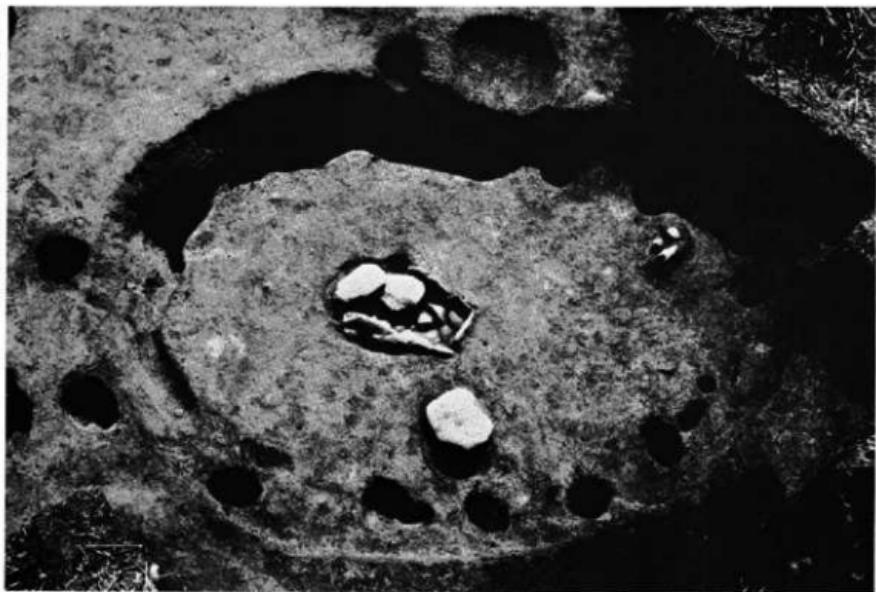
▲HY52全景



▲HY50全景



▲BY136全景



▲HY49全景



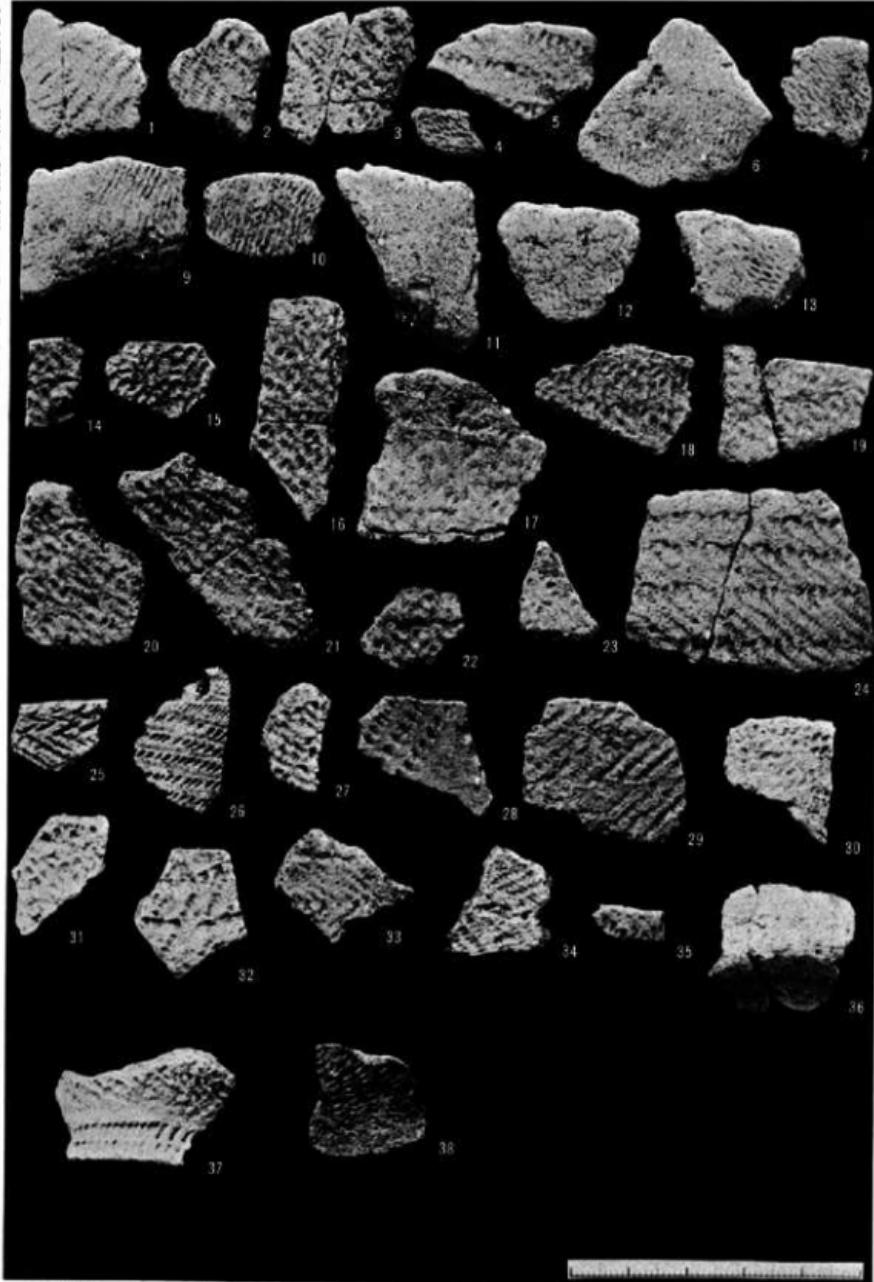
▲I Y94全景



▲DY13遺物出土状況



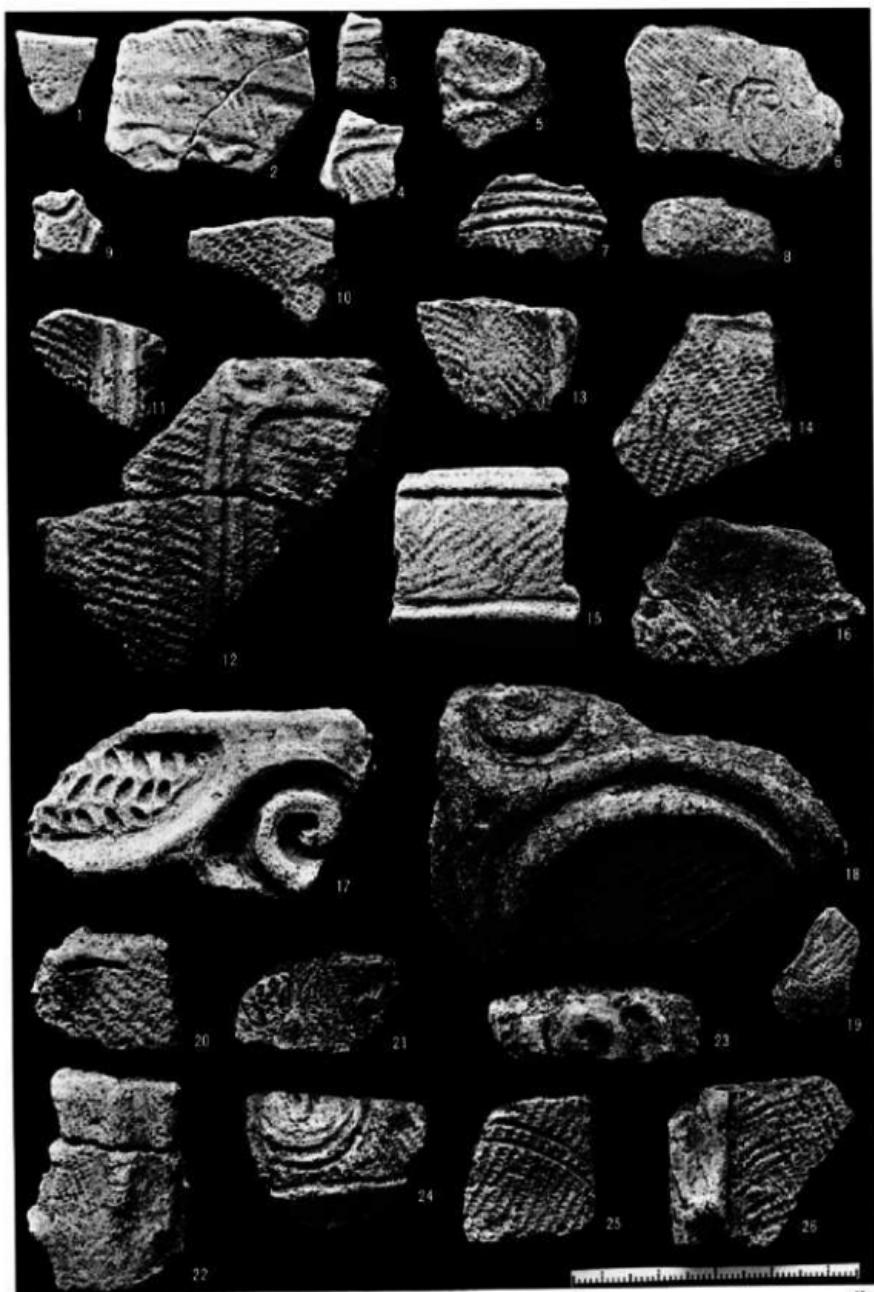
▲DY 3 全景



HY50出土 1~13, HY51出土 14~32
HY52出土 33~38

0

10cm



DY 1 出土 1~4, DY 3 出土 5~8, DY 4 出土 9~11

DY 6 出土 12, DY 9 出土 13, DY 7 出土 14, DY 8 出土 15~22

DY 10H+23~26

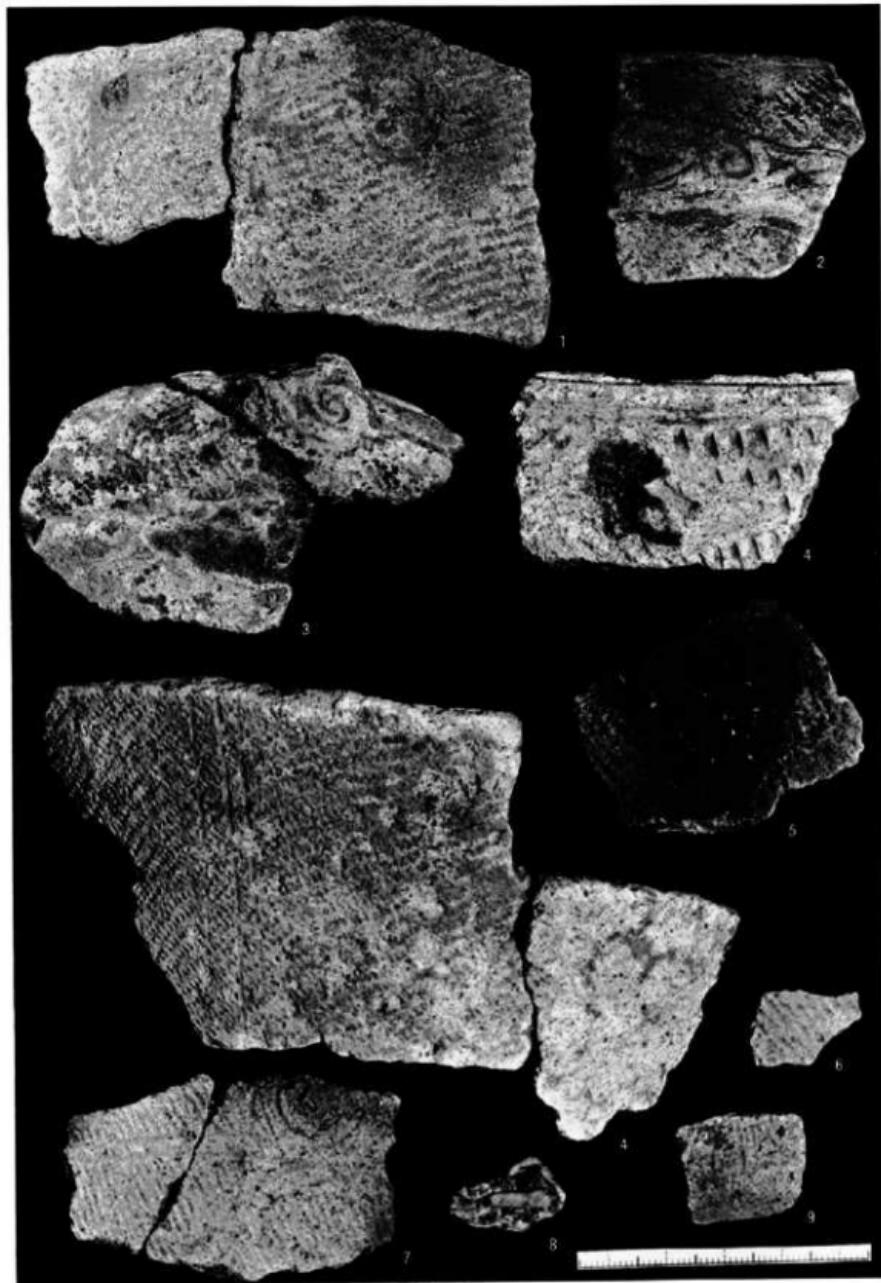


DY10出土 1～3, DY13出土 4～7

8

10cm

第九図版 法将寺遺跡遺構出土の土器（4）



DY13出土 1～4, DY15出土 5, DY17出土 6～9

9

10cm